The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『東より日出ずるが如く』にみる1950年代の影
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1992, 2, p. 57-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99649
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『東より日出ずるが如く』にみる1950年代の影

南　田　みどり

はじめに

テインペーミン（1914～78）の小説の時代背景は、その発表された時代と重なる場合が多い。それは、彼の関心が常に同時代にむかっていたからに他ならない。しかし、若干の歴史小説や特別な事情を持つ現代小説[1]などの例外もある。『東より日出ずるが如く』もまた、そうしに例外作といえよう。その時代設定は、主として1938～42年、発表は1953～57年で、そこには15～19年の開きがある。その年月の中でもとりわけ1942～45年は、ひとりの作家のみならず、ビルマのすべてを激動の波に呑み、万物の停滞と後退を余儀なくした。そのことも、この小説を例外作にした一因ではある。

作品の連載が始まった時、テインペーミンはすでに新たな激動に身を投じていた。行動しつつ書き続けてきた彼の眼が、50年代のビルマにも小説の題材を多く見いし出していたことは、想像にかたくない。しかし、彼は38～42年を再現する作業を優先した。この小説の中で主として明きらかにされるのは、1938～39年の学生闘争の経緯と、42年の日本軍侵略を導いたビルマ側の要因であった。50年代にあっても彼は、ファシズム侵略前夜のビルマを独自の視点で再現することに意義を見いだしていた。[2]だからこそ、50年代の激動の中でもこの長編の執筆に長期間を費やすことを惜しまなかったのであろう。

では、『東より日出ずるが如く』に、50年代のテインペーミンの激動はどのように反映されたのであろうか。連載期間は53年６月から57年10月であったが、執筆はそれよりも早く、少なくとも構想は50年頃にはあり、54年には結末まで考えられていたともいう。[3]それが事実とすれば、この小説は50年代の８年間、彼の

脳裏を去来していたことになろう。彼の作品中それほど長期にわたって取り組まれたものは、類をみない。本稿は、1950年から57年までの８年間に発表された彼の著作の傾向と、『東より日出ずるが如く』の人物像から、この作品にみる50年代の影をたどり、作品の50年代的意味の確認をこころみるものである。それによって、すでにいくつかの角度から加えてきたこの作品への考察[4]に、ひとまず終止符が打たれると考えるからでもある。

１．構想期　1950〜52

まず、『東より日出ずるが如く』がテインペーミンの念頭にあったと考えられる８年を、構想期と連載期に分け、さらにそれを１年ごとに区切って、彼がその期間に発表した著作[5]から、当時の彼の関心事や主張の傾向をたどっていくことにしたい。１年ごとの区分は、あくまで便宜上のものである。50年代は40年代の延長線上にあり、49年と50年の間に明確な線引きが可能なわけではない。とりわけテインペーミンの50年代前半の著作には、40年代の残響が尾を引いていた。

1950年、政府軍と反政府軍の激闘は続き、政府の基盤である反ファシスト人民自由連盟（AFPFL）[6]の主要構成要素・社会党は、朝鮮戦争の評価をめぐって分裂し、12月に左派が労農党を結成していた。作家は傍観者でなく解放のための組織に加わるべきだと主張して、タキン党（我等ビルマ人協会）[7]、人民革命党[8]、共産党（BCP）[9]などの政党にかかわってきたテインペーミンは、これら50年の政党の動向の外側で、一見傍観者となっていた。

しかし50年に彼が発表した新聞雑誌掲載評論５編、短編小説１編、連載１本、単行本１冊、その他２点[10]は、政治的色彩の強いものであった。それらの中で、50年代の８年間を通じて継承される関心の傾向は、第一に40年代の総括、第二に社会主義大国への憧憬、第三に世界平和の三点に大別されるようである。

嵐の40年代を総括することは、混迷きわめる現状を認識する前提でもあった。10月、彼は『戦時の旅人』の連載を開始するとともに、インド共産党（CPI）のダンゲ[11]あてに長文の書簡を送った。『戦時の旅人』は、42年の１月から12月、国内での抗日闘争、インドへの脱出、中国訪問までを回想する。それは、52年８月まで３年間連載された。そこで語られる抗日闘争期は、テインペーミンの政治

生活ではむしろ栄光に満ちた光の部分である。一方ダンゲへの書簡では、46年末から50年まで、彼の政治生活で最も屈辱に満ちた影の部分が語られた。なかでもBCP離党に至る事情[12]は、その後の彼の著作を理解する上で重要な鍵となると思われる。

書簡によれば、離党の主因に彼は党内民主々義の不在をあげる。47年以降彼と中央の間には、現状規定とりわけ民族資本家や社会党への評価で見解の相違が生じたが、異論を党内に公開して論議する場が保障されなかった。そこで彼は、「忍耐不足（プチブル性）と党内の活動経験不足」[13]のゆえに規律違反を承知で党外に意見を公表したという。その離党を彼は「いいかえれば私は党内闘争を回避したのです」[14]と述べ、新党を結成しなかったことについて「その是非はわかりませんが、党の分裂は望むところではありませんでした。それに、正しい路線を有していたとて、一個人では何も徹底的に行えないことを、歴史が証明していたからです」[15]と語る。ここから、当時の彼がBCP離党をいささかの瑕瑾となしていたことがうかがえる。

また書簡で彼は、50年当時のビルマの政治地図を次のように描いてみせる。まず政府を、経済的支配確立と、軍事的失地回復をなしつつあるが、48年当時より右傾化し、民衆に依拠せず、民族資本家を基盤に少数民族の封建的支配層と同盟しているととらえる。そして、内戦の状況を「政府軍対KNDO[16]、政府軍対白旗共産党（タントゥン派）、政府軍対赤旗共産党[17]、政府軍対白色人民義勇軍[18]、赤旗共産党対白旗共産党、白旗共産党対KNDOなどなど。政府内部でも社会党内部でも激しい抗争があります」[19]と述べる。

離合集散をくりかえす反政府軍の中でも、BCPの動向に最も関心が払われる。赤旗共産党（CPB）の共闘の申し入れを拒否し、帝国主義に支援されるKNDOと無原則的に共闘し、極端な土地改革の方針を押しつけて農民を分裂させ、異論を持つ党員を裏切り者として殺害し、民衆に服従を強いる恐怖政治をムスリム宗教主義にもたとえている。[20]

この書簡の内容は、2月に発表の短偏小説「裏切り者だとは」[21]にも反映された。そこでは、党から日和見主義者と批判され、若い妻を奪われ、政府軍には共産主義者として逮捕される中年農民指導者の視点で、内戦の功罪が語られた。

社会主義思想は30年代後半に、ビルマを従属と貧困から解放する闘争の理論的支柱となり、それを具現する共産党は、40年代前半、ファシズムとの対決を明確にして抗日闘争で輝き、50年には国内を骨肉の森と化す一翼をになった。しかしテインペーミンは、自己の体験した党内の無学習[22]、無討論、上意下達の封建的体質を、マルクス・レーニン主義に内在する問題でなくビルマの党個有の未熟さととらえ、党内民主々義の徹底やマルクス・レーニン主義政党の主導による民主々義革命の達成に希望を持ち続けた。

それを鼓舞したのは、ソビエト社会主義の「成功」や東欧革命などであった。とりわけ彼は、前年隣国の中国で成功した革命に心を寄せ、50年、中緬友好協会の設立に加わり、以後64年まで副会長をつとめた。49年に獄中で執筆した『新民主主義・毛沢東の教え』も、この年出版された。[23]

離党後も共産主義者を自負するテインペーミンへの、共産党支持者からの風あたりは強かった。BCP系学生は、彼が大学評議会メンバーとして50年にラングーン大学に作ったマルクス主義学習会をボイコットし、9月のカリキュラムにマルクス主義教育を導入するという彼の提案を、個人的売名行為、改良主義を非難したという。[24]

政治活動に足を踏み入れざる彼の状態に活路を開いたのは、平和運動であった。平和への最大の脅威を核兵器とみた彼は、50年、ビルマ世界平和評議会[25]に加わり、以後2年間副議長をつとめた。そして世界平和の立場から、政治発言を深めていく。

たとえば彼は、朝鮮戦争の第三次大戦への拡大を危惧し、社会党の一部にある楽観論や、両共産党はじめ反政府軍の世界平和への無関心を批判する。[26] さらにアメリカ帝国主義の危険性を指摘し、9月からアメリカの経済援助を導入した政府にアメリカの経済戦略を甘く見ぬよう警告している。[27]

さらに彼は、世界平和という課題で共産両軍が団結し、社会党をまきこめば、人民義勇軍（PVO）もそれを支持するであろうし、この三者の団結は、中道を看板に戦争勢力に接近する政府の動きへの歯止めとなる主張して、[28] 全人類的課題での共同行動を国内和平への突破口にしようと考えた。一見政治的無風期の50年は、その後の活動のための地固め期だったといえよう。

マンダレー等での戒厳令解除、マンダレー・ラングーン間鉄道の再開、第一回総選挙実施などが政府軍の回復を物語る一方、残存国府軍（KMT）のシャン州侵入や反政府軍再編など、内戦に新たな局面があらわれた51年、テインペーミンは政治活動を再開した。51年発表作品は、雑誌掲載評論12[29]、短編小説１、小冊子１、そして50年から継続連載の『戦時の旅人』であった。評論は量的に前年をしのぐだけでなく、分野も政治、紀行、経済、文学芸術へと多様化する。

40年代の総括は『戦時の旅人』の中に継続され、社会主義国への憧憬はさらにいくつかの面から強調された。たとえば、社会主義国のジャーナリズムに表現の自由がないという批判に彼は、資本主義国のそれこそ大資本の意のままであり、社会主義国のそれは労働者人民が主導権を握っていると、各国の実例をあげる。[30]

また急激な人口増加を、産児制限や戦争による陶汰で解決しようとする一部の主張を、生産力発展の見通しのない資本主義国の発想であるとし、ソビエトの母親英雄制こそ人命尊重の証左だと述べる。[31]

第三の関心・世界平和と国内和平は、さらに積極的に取り組まれた。３月の世評副議長報告で彼は、世界平和運動の動向を伝え、ビルマでも51年２月以降活動が盛んになり、さらに広範な運動への道が開けたと評価する。[32] この年、彼は50年以来主張していた和平への道筋を実現すべく、厳しい政治活動に再び踏み出した。

彼は、51年３月に結成された国民民主連合[33] に個人として加わった。ほどなく連合の強力な構成部分である労農党が脱退し、[34] ６月の第一回総選挙にむけ同連合は急遽人民和平連合[35] に再編された。それは武力に頼らぬ和平を目ざし、思想信条の違いを越えたゆるやかな連合体であった。連合は様々な妨害[36] の中で選挙を戦って敗北し、「圧勝」したAFPFLが内部に矛盾をかかえながらも政権を固めていく。

合法・非合法両社会における民主主義にあるまじき行為の見聞が、彼の眼を文学芸術の世界に転じたのであろうか。51年の評論の過半数は文学芸術関係である。50年から継承された三つの関心に、51年には第四の関心、絵画を含む新しい文学芸術の創造が加わった。49年のターヤーとの論争[37] も再燃した。テインペーミンは「口では人民文学。書いたものは自分だけにしかわからぬことば。口では民

族文化。書いたものはアメリカの模倣」[38] と、進歩的装いをこらしながら、難解さのゆえに民衆の立場に立てないターヤーの詩を批判し続けた。

51年初頭、『現代の悪霊』（1940）以来10年振りの長編小説『愛すればこそ』が着手された。それは彼が服役中だった48～49年に書いたシナリオの小説化であった。シナリオはブリティッシュ・バーマ映画社に譲渡され、改変されて、51年末には映画化の企画が進んでいた。テインペーミンはこの改変に不満で、小説化を開始した。[39] しかしそれは、政治活動多忙化のため三分の一で中断された。

51年３月には短編「第三流の場所」[40] が発表された。この小説と『愛すればこそ』には、内戦による民衆生活の破綻という共通の要素がある。それは、『愛すればこそ』で主人公の愛する零細露店商一家の生活の危機という脇筋に、「第三流の場所」では戦火のため村を捨て、都会で露店商となる主人公の挫折という主筋に描かれ、本来の職業－前者では音楽家、後者では農業－で生活できない「悪いご時世」を登場人物に嘆かせる。こうしてテインペーミンは、民衆の悲哀から時代を描く手法をより多く用いるに至った。

1952年、彼は雑誌掲載評論10 [41]、新聞連載１、小冊子１、単行本１、長編小説１を発表した。50年から継続連載の『戦時の旅人』は８月で終了し、40年代の総括はいったん打ち切られた。一方社会主義国は、この年ますます彼に身近かなものとなった。彼は５月のメーデーでビルマ代表として、10月にはアジア太平洋平和会議準備委員会の一員として二度訪中し、中国に関する評論４編を発表し、単行本『さらば古き時代』を出版した。『さらば古き時代』は５月訪中の報告で、農村、工場、学校などの見学や人々の話から新生中国の息吹きを伝えるものであった。

一方世界平和と国内和平は、政治活動にさらに解消されていく。旗印が和平でも様々な政治色[42] の野合だった人民和平連合では、選挙惨敗後の51年12月頃から意志統一が困難となっていた。そこで、より機能的な活動めざして連合の政党化計画が練られるが、最終段階でテインペーミンがボウ・ラヤウンらPVO勢をひきいて袂を分かち、人民統一党（PUP）を結成する。[43] 共産党離党の４年後、彼が強引に新しいマルクス・レーニン主義党を発足させ、書記長となったことは、地下共産党への幻想を断ち切ったことをも意味していた。

52年３月、当面の最重要課題を世界においては平和、国内においては国土戦場化阻止とするPUP中央決議にもとづき、彼は政府と反政府軍に、和平に関する５項目の提案をおこなった。[44] 政府に対して彼は、経済援助とKMT利用の二面から侵略を企てるアメリカ帝国主義への過少評価を戒め、また反政府軍に対しては、反帝民族解放と同志討ちの二様相を呈する内戦の渦に呑まれることなく、ひとまず民族資本家政府と共闘して主要な敵であるアメリカ帝国主義と対決するよう訴えた。そして、内戦停止は民主主義革命の戦術であり、人民に力量がない時期のスローガンとして適切なのだと強調する。しかし結党時の、書記長自ら統一を唱えつつ分裂に走るという、理論と実践の矛盾が象徴するように、「実践面や組織活動面を人民統一党は十分行い得ていない。しかし理論面では効果的な活動を行い得ている」[45] というPUPは弱小政党にとどまり続けた。

一方、新しい文学芸術の創造への関心は、『俳優ウー・ポセイン』と『愛すればこそ』の完結に実を結んだ。ビルマ古典芸能への興味は、幼い頃からテインペーミンの血肉に浸透していたが、政治とかかわって以後彼は、それを人心を軟弱にするものとしてつとめて排除した。戦後新しい芸術観の啓示によって認識を新たにした彼は、52年、すでに引退していたビルマ芸能の巨星ウー・ポセイン（1882～1952）を訪れ、その1900年頃から35年間[46]の軌跡を、２月から５月まで新聞連載する。奇しくもウー・ポセインは12月に没し、それは貴重な伝記となった。

『愛すればこそ』は52年12月の上映と同時発表めざして執筆され、完成した。身分の差を越えた純愛の勝利は、若い二人の音楽への情熱によって支えられ、その底には伝統と革新の合一した民衆のための音楽の創造という理想が流れた。それはテインペーミンの小説の中でもひときわ異彩を放つ存在となった。

こうして1950～52年の３年間、彼は40年代の総括、社会主義大国への憧憬、国内和平実現のための困難な政治活動、そして新しい文学芸術の創造に心を傾けながら、『東より日出ずるが如く』を熟成させていたのであった。

２．連載期　1953～57

『東より日出ずるが如く』は、1953年６月号から月刊ミャワディ誌に連載された。[47] 12月号までの７回で、小説全体の五分の一近くを発表するというペースは、

執筆期間中で最も速い。それは、長年暖められた創作意欲の発現であった。

53年発表部分では、1938年までの主人公の自己形成史と38年前後の彼をとりまく内外の動向、そして38年7月から12月までの、印緬紛争や油田労働者ストなどいわゆる1300年闘争の一端が語られる。自己形成史には作者の自伝が、1300年闘争には当時の記録が混入される。これらが主人公の回想形式で語られたため小説的印象が薄まり、ミャワディ9月号の作品末尾には、作者による1300年闘争の資料提供依頼文と共に、この作品があくまで小説であるとのことわりが掲載された。[48]

53年2月、テインペーミンは『戦時の旅人』の続編『連合軍とビルマの使節』の連載も開始し、43年1月から45年10月、CPIへの接近、BCP入党、抗日蜂起の成功、帰国に至る40年代の回想を再開した。53年にはこれら2本を含め3本の連載、11編の評論と小冊子[49]が発表され、執筆量は著しく増加した。53年以降も、40年代の総括は重要な位置を占める。というのは、30年代と40年代が不可分である如く、38～39年の事件が42年の事件の序曲となる『東より日出ずるが如く』もまた、そうした総括の一端をになうからである。53年、テインペーミンは『連合軍とビルマの使節』で40年代半ば、『東より日出ずるが如く』で30年代末という二つの時代を併行してたどる作業に入ったのである。

社会主義国への憧憬もまた、構想期より継承された。53年4月5月連載[50]の「スターリンと私」では、スターリンの死に深い哀悼の意を表すると共に、よき共産主義者となるべく決意が述べられる。テインペーミンはすでに戦前、独ソ不可侵条約締結やソ連のフィンランド侵略でもスターリンを不動に支持して仲間の不評を買った。戦後はスターリンの芸術論にも影響を受けていた。BCPで孤立した当時も、「スターリンの理論を完全にものにし、スターリンの実践どおり行動し、スターリン的幹部となれば、無謬の人物になれる」[51]と考え、その著作の学習に励んだという。彼の中では、自己が体験したBCPの非民主的封建的体質も、合法左翼のセクト主義も、スターリンとは全くかかわらぬものととらえられた。社会主義大国はその憧憬の対象のみならず、孤独な共産主義者の支柱であった。

一方、世界平和と国内和平への希求が導いた政党活動は、はかばかしい進展をみせなかった。「ビルマの革命政党のあやまちから教訓も引き出した。ゆえに我々

の政治思想は正しい。しかし我党は……ビルマ政治をよくも悪くもする決定権を握るほどの党にはまだ至っていない」[52] と、53年7月開催のPUP中央報告が述べるように、理想論を展開するが[53]組織的には弱体であった。創立1年余にして、21名の中央委員会は委員の離党、地下潜伏、投獄などで成立せず、9名の書記局も5名に減少、平和団体に助言者として参加できても、民衆を率いてデモに加わる力を持たなかった。しかも地方の組織では党活動がなく、セクト主義的分裂もみられたという。[54]

これらの原因をテインペーミンは、第一に、政府や反政府軍のような武力、財力がない、第二に左翼政党のセクト主義が根強い、第三に革命政党の過去のあやまちのゆえに民衆の尊敬が獲得できない、第四に幹部の多くが思想的に弱いことなどに求めた。そして、当面の課題を学習討論による幹部育成とし、実践面より理論強化を重視した。[55] PUPの正しい理論なるものも実は、テインペーミンを中心とする限られた幹部のものであり、党中央は民衆はおろか一般党員からもはるかな存在であったといえよう。

PUPの前にたちはだかる壁は、党内問題だけではなかった。53年7月、KMT問題は国連提訴に至るが、各地で激戦は続いていた。テインペーミンのかかげる内戦停止スローガンは、地下反政府軍からも地上左翼からも、反革命、武装解除と批判された。しかし彼は、人民革命勢力が「自己のあやまちを認め、それを正し、人民の利益を常に考え、マルクス・レーニン主義者の団結と民族の団結をめざせば、必ずや人民革命勢力は強大となる」[56] と、驚異的な楽観性を示した。

一方、新しい芸術創造への関心は9月発表の「画家ウー・バチーの仏伝画研究」[57] に顕著にみとめられる。そこで彼は、画家の手法の伝統的特徴をあきらかにした上でその進歩的側面を評価し、古典詩の描写にもなぞらえて、まだ遅れていた絵画批評に先鞭をつけた。

53年には、これらに第5の関心・国内地方紀行が加わった。6月、彼はKMTとの戦闘が一部で続行中のシャン州を訪れた。南部のカロー、タウンヂー、ニャウンシュエー、インレーを回って土地の産業や民衆生活、そして解体されつつあるシャン州独特の封建制[58] などを取材し、紀行「楽しき宮殿は戻らじ」を10ヶ月にわたり月刊ミャワディ誌に連載した。彼は地方紀行の意義を第一に、連邦各

州住民の生活を認識することによって民族相互の友好を深める、第二に非近代的社会関係に埋もれた豊かな資源の存在に光をあて、開発への希望と意欲を育てるという二点に見い出している。[59]

1954年に発表された『東より日出ずるが如く』は作品全体の四分一余を占めた。53年連載分とあわせると、すでに小説の二分の一近くが発表された勘定になる。54年発表部分は、1938年12月から39年3月頃までの事件ービルマ政府を包囲した学生への官憲の襲撃、全学生へのスト指令、襲撃された学生の死亡、学生のハンスト、スト解除決定をめぐる学生の亀裂などである。収集した資料は、報道や口こみという形で駆使された。客観性が強調されるのは、それが作者自身かかわった事件であった[60] からだけではない。心情的にはスト続行にひかれるが、団結を守るために学生指導部の解除決定に従うという主人公の行動を通してテインペーミンは、50年代の読者に民主主義のあり方を伝えようとしたかのようであった。

『東より日出ずるが如く』のために収集された1300年闘争の資料のうち、ナガーニージャーナル[61] 掲載評論15編を、12名の執筆者の経歴紹介と共に収録した『社会主義と我等ビルマ』[62] が、54年テインペーミンの編集で出版された。12名の執筆者の大半が当時も存命で、『東より日出ずるが如く』に実名で登場する。『社会主義と我等ビルマ』の序によれば、テインペーミンは彼らの評論に、当時のビルマ社会主義思想の一定の到達点を見いだしたという。彼は1300年闘争を、タキン党による独立闘争と社会主義思想の初の実践的結合と位置づける。そして、当時受容されていた社会主義思想を全面肯定の立場からでなく、ありのままに示すことによって、「当時マルクス主義の種をまき、今日ビルマの指導者となっている人々の過去の歩みをよく見つめて、彼らの現在の生き方の是非への評価の一助となれば、彼らを正しい指導者とならしめることも可能かと期待する」[63] と述べる。

『東より日出ずるが如く』の中でも様々な人物の発言や声明にうかがえる、当時のビルマ左翼の未成熟だが未分化な思想状況は、『社会主義と我等ビルマ』である程度のまとまりを持って示された。

そのような作業は、彼の政治活動にも示唆を与えた。54年3月、PUPは全政党と反政府軍あてに、即時停戦してKMT一掃にあたるよう要求する公開書簡を

新聞紙上で発表した。BCPはこれに対して、KMTの侵入は反政府軍攻撃のためのアメリカ帝国主義とビルマ政府のさしがねであり、ビルマの主要な国内問題ではないと反論した。帝国主義とビルマ政府を同列視して人民民主主義革命を主張するBCPに対して、テインペーミンは6月、PUP執行部名で、ビルマの現段階では、民族資本家を基盤に持つ政府・社会党・AFPFLの善意の支持者をもまきこんだ、マルクス主義政党の主導による民族民主革命が必要なのであり、和平は民衆の意志だと主張した。そして、世界革命勢力は前進しているので、AFPFL・社会党をまきこむ展望はあると述べる。[64] それは、30年代ビルマ左翼の軌跡をまとめる作業や、54年のネルー・周恩来の平和五原則発表、周恩来の来緬、ウー・ヌ首相の訪中など中立外交の活況にも影響された楽観性であったと思われる。

54年は雑誌掲載評論5、序文1[65] で、評論数は前年より減少する。だが、連載は増加し、『東より日出ずるが如く』、『連合軍とビルマの使節』、3月終了の「楽しき宮殿は戻らじ」に、8月開始の紀行「メルギーの貝の中の真珠」が加わった。テインペーミンはビルマ最南端のメルギーを、54年4月に訪れた。そこは父方祖父の出身地で、彼の長年の憧れの地であった。しかし、自己のルーツをたどるという夢はいつしか「メルギー住民すべて親族という気持ち」[66] に変化していたという。そして、往来困難の遠隔地だが美しく、貴重なメルギーを、深海の貝の中にひそむ得難い真珠にたとえ、漁業、貝細工、織物などの産業や貧しいモーケン族の生活と共に紹介する。

54年7月、40才を迎えた彼は、広く旧友を招いて一種の厄落しをおこなった。招待状で彼は、成功より失敗の多い人生だったが、向上のため活動せずにはいられず、ともかく40才まで生きながらえた。かっては若くみられることを喜びとしたが、今は老いを誇りたい気持ちが生じ、今後も今までと同じ年月を生きるつもりだと語る。[67] 『東より日出ずるが如く』は、彼の人生の節目を共に歩む記念すべき作品となった。

1955年に入ると、『東より日出ずるが如く』の背景は1939年3月から11月頃に移る。かろうじてスト解除問題での落ちこみを克服した主人公が、人生のハードル・卒業、就職、女性問題に直面する部分である。緊迫する世界情勢をおりまぜながらも記録性は薄れ、創造性が増す。テインペーミンは主人公を既婚女性との

シャン旅行という大胆な行動に駆り、53年の彼自身の旅行の見聞を駆使して愛と苦悩のトーンを高めていく。なお、『連合軍とビルマの使節』の連載が5月号で終り、40年代の回想の一端が終了した。

過去から現在へ、テインペーミンの作品の時代の比重は移動しつつあった。55年、4年振りに現代を舞台とする短編小説「櫓の折れた漕ぎ手グエセイン」「不合理なことよ」「完全浄化」[68] が各々6月、7月、9月と続けて発表された。いずれも女商人、小役人、雑役夫といった民衆を主人公にして、失踪、失業、締めを各々の結末とする。これら三編には、彼が48年以来描くべきものとして主張し続けた、民衆の困難解決への道は示されず、困難そのものが語られるにとどまる。

その文学的主張にも微妙な変化が生じていた。55年、彼は作家が、民衆の要求である和平獲得のために運動してこそ民衆と喜怒哀楽を共有できる。質の高い文学が書けると主張した。また作家が、民衆の困難の根源－和平の敵対物である貧富の差、無権利、弱肉強食、不法、搾取、階級矛盾、民族矛盾などを示し、読者の怒りを扇動してこそ和平が実現できると述べる。[69] しかし48年当時の主張のように困難解決への道、抑圧される階級解放への道を作品の中で描くことにはもはや言及されない。

40年代末から50年代初頭にかけ、簡単に獲得されるかに見えた和平や左翼統一は、内戦発生後7年を経てなお実現に遠く、たたかいの複雑な様相は、民衆の理解の域を越えていた。傍観者となることを恥じて展望の見いだせぬたたかいに挑むテインペーミンも、自らを迷路に追いこみつつあった。55年の三短編は、過去の軌跡から現代を確認することに飽き足らなくなった彼の叫びである。中でも「櫓の折れた漕ぎ手グエセイン」は、不毛のたたかいの中で民衆との断絶を味わう知識人の姿をその語り手である弁護士に投映し、テインペーミンの小説に新たな境地を開いた。

55年、政治活動も新たな段階を迎えた。PUP、人民和平連合、労農党、我等ビルマ人協会の指導者間の数度の協議を経て、11月、国内和平、民主主義、民族団結、民族経済建設、世界平和擁護の5点を一致点として結成されたビルマ連邦民族統一戦線（NUF）が発足した[70] からである。それは、反政府軍に対して大恩赦令を発令する一方で武力掃討作戦を続行し、村落にも武装自衛組織を結成さ

せる政府を脅かすに足る勢力となった。

55年のテインペーミンの、小説以外の発表作品は文学に関する評論3、報告1で、連載は、5月に終了した『連合軍とビルマの使節』と「メルギーの貝の中の真珠」に続き、7月から「北へ帰る」[71] と、不定期連載の『大学紹介』が開始した。新しい国造りに必要な理工系専門知識を供給するラングーン大学各学科をテインペーミンが訪れ、講義風景や施設を見学し、スタッフにインタビューするルポルタージュ『大学紹介』は、貧弱な設備、頭脳流出、述語の翻訳など研究者のかかえる問題と共に、各専門分野の教育内容を学外者むけにわかりやすく紹介するものであった。

一方、56年2月まで連載された「北へ帰る」は、紀行に分類されるが他の紀行と異なり、「北」ーマンダレーを中心とする上ビルマへのテインペーミンの15年振りの帰省を描いて、自伝的要素も持つ作品である。彼は40年の母の死以来その地を踏まず、55年4月、父重態の報を受けて父と最後の対面をする。父子の間には根深い葛藤が存在した。ゆえに、彼の筆は父についてよりも、故郷モンユワ一帯の戦禍からの復興状態や、反政府軍統治期の圧政、そのあおりを受けた旧知の人々の後日談などに多くを裂いている。そこで彼は、政府軍も反政府軍も恨まず、ただ与えられた運命に甘んじる、最大の被害者・民衆の生の声にも耳を傾ける。ラングーンを離れ、地方の生活や民衆にふれることは、彼の情勢認識を深める上でも有益であった。

1956年、『東より日出ずるが如く』の背景は速度を増し、1939年末から41年6月に至る。それは、主人公が許されざる愛の絆に束縛されながらマルクス主義秘密学習会に出席し、日本軍の援助で武装蜂起を企てる人民革命党に入党し、父の死でそれらを中断して帰省するという、抗日への伏線をなす期間である。1938年以降作者との類似性を排して異なる状況を与えてきた主人公を、テインペーミンは再び故郷に戻し、自己に近づける。

56年1月には、前年の「櫓の折れた漕ぎ手グエセイン」の続編ともいえる弁護士物「助けられるなら助けて下さい」[72] が発表された。気まぐれの善意から貧しい女に手をさしのべ、約束の日に現れない女に立腹する弁護士の物語を通してテインペーミンは、権利意識を持つことすら知らぬ民衆のしいたげられた生活と、

民衆の知識人への根深い不信を描き出した。弁護士物は64年に復活し、65年で終了する。しかも56年1月以降、64年11月の弁護士物復活までに発表された短編はわずか2編、うち1編は私小説である。長編に至っては、『東より日出ずるが如く』以降67年10月まで登場しなかった。「助けられるなら助けて下さい」をおおう弁護士のやりきれなさは、進展しない政治活動や民衆との距離感からもたらされたテインペーミン自身の概嘆であった。

56年のテインペーミンの文学的主張には、さらに新たな転換がみとめられる。12月、彼は文学者の日の作家協会会長挨拶[73]で、古典文学を嫌いビルマ文学の質の低さを嘆き、西欧文学のみを崇拝して難解な文を書く人々を批判し、今日の作家は古典からも民衆生活からも学ぶべきだと説く。民衆の中に題材がないと嘆く作家は、真に民衆の中に入っていないか、あるいは新奇な題材ばかりを追い求めているのであり、平々凡々な事柄を芸術的に描ける作家こそ一流だと主張する。そして、「百の生命に百の事件」といわれる如く「民衆生活を真に反映して書けば、書き尽くせぬほど（題材は）多い」[74]と述べる。

さらに彼は、生活のための労働と生命の再生産という、生きとし生ける者の二大事業のうち、多くの作家が後者、中でも男女の愛のみを重視して書き、これが過剰して退廃的恋愛物に転落する場合が多々あると説く。そして、「人民大衆は生活の安定と向上のため、生業を基礎として様々なたたかいをおこなっている。人生をたたかいつつ勝利することもあれば、敗北することもある。敵が勝利して無念に思うこともある。ゆえに様々な喜び、悲しみ、笑い、嘆きがあらわれる」[75]と述べる。

48年の、作家は抑圧される階級解放への道を示せという主張は、55年、民衆の困難の根源を示せというそれに変わり、56年には「生活のためのたたかい」を描けという主張に変化した。少なくとも文学に関する限り、民衆の解放にむけて扇動するという高所からの視点でなく、民衆の中に入り様々な人生から学び、それを描くという、彼らと同じ目の高さが主張されるに至ったようである。

55年から下降気味であった『東より日出ずるが如く』の執筆ペースは、56年さらに落ちた。5月、10月、12月は休載で、年間連載量も53年の7ヶ月分にも満たない。5月号巻末には、今まで一度も休筆しなかったが選挙に立候補し多忙のた

め……とのことわりが掲載されている。10月は魯迅没20周年のための訪中、12月号はアジア作家会議のための訪印による休載と思われる。2月に「北へ帰る」の連載が終了した。『大学紹介』が3回不定期連載、その他の評論は2編、そして政治評論集『革命時代の体験』が出版された。

56年1月、テインペーミンは評論「独立8年の新局面」で1948年から56年までを彼なりに総括し、[76] 4月の総選挙にのぞんだ。4月の第二回総選挙では、NUFはAFPFLの激しい妨害にあいながら250議席中47議席を獲得して善戦[77]。ブダリン選挙区から立候補[78] した。テインペーミンも当選した。野党の進出に危機を感じたウー・ヌは、AFPFLの浄化に専念するため6月、首相を辞し、ウー・バスエを首班とする社会党内閣が誕生する。[79]

国会議員としてテインペーミンは、国会での民主主義的権利を主張し、かつ最大限に活用した。56年の4回の国会発言[80] で彼は、少数意見に対する平等な権利の保障、英米ソ各政府に核兵器禁止決議の提出、党利党略を離れて民衆生活向上を主眼にした予算案の作成、和平会談の実施などを要求している。なかでも、1月のBCPからの和平交渉に関する提案を無視して大攻勢をかけた政府に、世界情勢もかつてと異なり、過去の政治的見解の相違はもはや存在しないも同然で、今会談すれば容易に合意が見い出せる根拠があると、[81] 和平交渉を促す楽観的発言をしているのが注目される。

この楽観性の背景には、56年2月のスターリン批判による国際共産主義運動の変化への期待も存在するのであろう。「批判」へのテインペーミンの直接の言及は見い出せないが、6月に出版された『革命時代の体験』にその影響がうかがえるからである。『革命時代の体験』は、1910年代の独立運動の萌芽から、56年初頭までのビルマ政治を語り、『東より日出ずるが如く』と同規模の大部の著書である。第二次大戦前の部分は、『東より日出ずるが如く』のために収集された資料を活用したと思われる書きおろしで、その後の時代は、彼が当時発表した評論や声明に解説を付記したものである。同書構成上の大きな特徴は、1945～49年のBCP時代とクーデター未遂による服役前後の時代が大半を占めることであった。[82]

その序でテインペーミンはまず1938年以降を、マルクス主義勢力が闘争の全面

に進出した「革命時代」と規定し、それ以前の時代と区別する。そして、多大な犠牲を払ったこの時代の体験をふりかえり、批判すべきを批判して傷をいやし、国民に借りを返すために同書を執筆したという。これは1950年以来取り組まれた40年代の総括を補足発展させる作業であった。

彼はまた、現在となっては誤謬と判明した主張をも、反省材料としてありのままに提供し、新たな歩みの一助としたいと述べる。その一例にはチトー批判もあげられる。[83] スターリンを崇拝していたはずのテインペーミンのこの発言と、45～49年に関する詳細な資料提供こそ、スターリン批判の影響を物語るものではあるまいか。 PUPを結成してBCPへの幻想を断ち切ってもなお、社会主義大国への憧憬からスターリンにコンプレックスを持ち続けたテインペーミンも、いったん「批判」がおこると立ち直りは早かった。というのは、CPIという媒介を経たにせよ、その武装路線の押しつけで大きな犠牲をこうむったビルマも、さらにその渦中で翻弄された彼自身さえも、ある意味ではその犠牲者だったと理解されたからではなかろうか。かの「犯罪」がスターリン個人に属する特殊性によるものであり、その寄って立つ思想そのものとはかかわりがないととらえたことも、彼の楽観的な情勢認識をもたらしたのであろう。40才を迎えた1954年が彼の実人生の節目であったように、スターリン・コンプレックスから解放され、国会議員となって合法社会で活動の足場を広げた56年も、彼の政治生活の節目となった。

1957年１月から10月まで、彼は55年56年をしのぐ勢いで『東より日出ずるが如く』を完成させた。57年発表部分は、41年６月から42年７月、女友達の死、日本の空襲によるおびただしい死、許されざる愛の精算、日本軍への期待とその裏切りによる失望、そして抗日闘争へと、主人公の心の動きが激動の流れと重なり、新たな出発を暗示する最も密度の濃い部分である。前年に生じたテインペーミンの解放感が、一気に結末まで筆をふるわせたとも考えられよう。

57年、彼は作家協会会長として、リアリズム文学の問題、作家運動、作家の権利などについて発言している。[84] それらは前年までの発言を踏襲したもので、著しい変化はない。また国会発言では議会制民主主義の崩壊を危惧し、教育問題を通して団結の再建と和平を訴えている。[85] 57年３月、NUFは、反政府軍の和平提案に応じず弾圧を強める政府への不信任案を提出したが、投票の結果否決され

た。

50年から57年の８年間で、その著作からうかがえた社会主義大国への憧憬は次第になりをひそめ、世界平和と和平は政治活動の中に解消し、新しい文学芸術の創造は、いくつかの小説や評論、そして民衆生活に真実を求める紀行などの中に実を結んでいった。

この８年間の著作上の最も大きな作業は、40年代の総括であった。テインペーミンは1950年に「ダンゲへの書簡」で46年から50年を、そして1950年から55年に回想『戦時の旅人』と『連合軍とビルマの使節』で42年から46年を、そして1953年から57年に小説『東より日出ずるが如く』で38年から42年をたどった。つまり彼は、50年から57年の８年間を費して、38年から50年までの12年間を、書簡、回想、小説などの形式で追体験したのである。ただしそれは時の流れに沿ってなされず、まず50年に、最も記憶の生々しい 46～50年が書簡で、次に50～55年に42～46年が回想で、最後に53～57年に38～42年が小説として再現された。最も遠い過去である38～42年は入念に暖められ、小説として世に出たのであった。

40年代の総括は56年の『革命時代の体験』で完成し、『東より日出ずるが如く』の完結でテインペーミンは40年代の影を断ち切った。そうした狂気の時代の冷静な総括は、50年代への教訓として生かされるべきものであった。現代政治とむきあいながら作業に取り組む中で、テインペーミンの和平と左翼団結の夢は、かきたてられこそすれ、減退することはなかったと思われる。

３．主要人物にみる50年代の影

1950～57年、『東より日出ずるが如く』の構想期と連載期に発表されたテインペーミンの著作から、この長編が政治活動の中で書かれ、50年代の彼の政治活動の前提をなす過去の総括の一翼をになう位置に連なることが確認できた。では逆に、この長編の中から、50年代の影はどのように読みとれるのであろうか。

『東より日出ずるが如く』が、それまでのテインペーミンの小説と比べて小説らしからぬ印象を与えたことについて、彼は後年次のように述べている。この作品を「小説と思わず、長い随筆だとか、自伝だとか思う人々もおります。本当に最初から最後まで読み返していただきたい。まぎれもなく小説であることが、お

わかりになるでしょう。小説家とは、カードを切る人間です。他人のこと自分のこと、他人の思い自分の思い、あのことこのことなど、カードをまぜて切るのが小説家の仕事なのです。カード切りが巧みであればそれだけ、小説も良くなります」[86]

動かし難い史実を筋の流れに重ねる『東より日出ずるが如く』の中で、人物像は数少ない動かし得る要素、つまりカード切り可能な要素であった。200を下らない登場人物名のうち、主人公に直接かかわる人物は、モデルがあるとしても脚色された架空の人物と、実在実名の人物に二分される。前者には非政治的人物が多く、後者には政治的人物が多い。まず、前者の中でもカード切りが最も容易と考えられる主人公自身や、彼をめぐる女性たちの姿から50年代の影をたぐりよせてみよう。

第一の50年代の影として、主人公ティントゥンの動揺性があげられよう。彼の揺れは、おおまかには次のように流れる。36年ストには、長いものに巻かれろ式に参加。読書し、世界情勢を認識して意識が高揚。38年の印緬紛争で当惑し、のちに適切な活動の場を得て発奮。しかし父の圧力とタキン党の分裂で落胆。世界情勢のさらなる認識と仲間への友情で逃避を思いとどまり、39年1月の油田労働者ラングーン入場と支援活動で高揚。2月の学生スト解除で低迷し、39年末のマルクス主義学習会や人民革命党への参加で再起。41年末以降の公私両面にわたる状況の急転の中で、抗日にむけてゆるぎない自己を確立していく。交互に訪れる高揚と低迷にはらせん状の質的転換が与えられる。低迷の主因は運動主体の分裂、高揚の主因は友情、連帯、学習とされる。

「この小説を書き始めた頃、大学で共産党員が相当活発な時でして、その当時、テインペーなどのやることなど何もかも悪いと攻撃する人々もいました」[87] と彼が語るように、ティントゥンの動揺性もまた、50年代の彼の政治動向を反映して攻撃の対象となっていた。しかし、存在感のある生身の主人公像の創造を彼は「成功」ととらえた。[88]

この動揺性は後年、『ストライキ学生』（テインペーミン1938年）の果敢な学生指導者ニョウトゥンとの比較においてミャタンティンが批判した。[89] が、テインペーミンによる動揺人物の登場は、『東より日出ずるが如く』が最初ではない。

内戦の徴候を示す46～47年を背景にした『開けゆく道』（1949）でも、分裂に苦悩し、揺れる善意の闘士たちが描かれた。しかもそれ以来テインペーミンは、48年以後の時代を背景とした闘士像を描かなくなる。そして、50年代に描いた38～42年の闘士ティントゥンに、「実際政治ごっこ以外の何ものでもなかった。というのは現在に至るもぼくは、まだ心底政治にどっぷりつかる腹づもりがないからである」[90] とまで語らせる。このようなさめた眼は、闘争の渦中の人物のものとは考え難い。動揺人物ティントゥンは、38～42年を生きながら、50年代の分裂、内戦の影を背負う特異な人物であり、テインペーミンの小説における最後の闘士像でもあった。

ニョウトゥンとティントゥンは、政治闘争にかかわる上ビルマ出身ラングーン大学生という共通項を持つ。この共通項のゆえにティントゥンを批判したミャタンティンは、しかしながら上ビルマ出身ラングーン大生で、いまひとりのテインペーミンの主人公の存在を失念したかのようである。それは『愛すればこそ』（1952）のミョウミンであった。ニョウトゥンからティントゥンへの飛躍の間にミョウミンを置けば、ティントゥン像への理解がさらに容易となろう。

『愛すればこそ』は1947年５月頃から48年10月頃のラングーンを舞台に、ミョウミンと３人の女性との愛を軸に展開する。『ストライキ学生』の時代から10年余、ミョウミンにはニョウトゥンと対象的な性向が与えられた。第一に、彼はニョウトゥンのように大学教育に批判的でない。みんなと同じように授業を受け、試験に合格するために勉強し、将来は高級官僚試験を受けることもばく然と考えるが、さほど熱意はない。これは『東より日出ずるが如く』冒頭の、政治活動にかかわる以前のティントゥンの状況に酷似する。

第二に、ミョウミンも基本的に民族主義的自覚をそなえるが、学生運動や政治活動には加わらない。同じ意識状況だったティントゥンが運動に深入りしていったのは、30年代左翼の思想状況が未分化で分裂に至らなかったため、つまり活動の場が用意され、友情も連帯も健在だったためである。ミョウミンも、47年７月のアウンサン将軍暗殺時には思い余ってPVOに入ってみるが、分裂抗争に嫌気がさし、すぐに活動を離れていく。このように分裂に意気くじかれる善意の知職人像は、すでに内戦時代の産物としてミョウミン像で確立されていたといえよう。

第三にミョウミンは、ニョウトゥンのように古典詩歌を排斥せず、むしろそれらを愛でる。自ら創作演奏し、伝統音楽に近代的要素を加えて復興させることを夢見、演奏家の地位の低さにも心を痛めている。ミョウミンにとっては、音楽だけが唯一の自己実現の手段であった。ミョウミンが最後に、名誉とも財とも無縁の音楽家の道を選び、民衆の立場に立った芸術の創造をめざすところにも、当時のテインペーミンの芸術観がうかがえる。

自ら演奏しないまでも、ティントゥンにとっても詩歌は、政治活動の疲れをいやす泉であった。基本的な意識や性向において、ティントゥンは、ニョウトゥンよりむしろミョウミンに近い存在であった。ゆえに第二の50年代の影は、前作『愛すればこそ』との主人公像の類似である。

この類似は、彼らの恋愛の枠組にさらに顕著にあらわれる。恋愛にストイックだったニョウトゥンに対してミョウミンは、竪琴演奏家で貧しい露店商のマ・キンウィン、女子大生デイジー、実業家マ・フラティンとのかかわりを経てマ・キンウィンのもとに戻る。一方ティントゥンは、最初令嬢ウィニーにひかれ、次に女子大生マ・ミンウー、実業家マ・ミャフミー、高校生マ・キンティッの間を揺れ、マ・ミンウーの死、マ・ミャフミーとの別れを経て、最後にマ・キンティッとの再会が暗示される。ミョウミンとマ・キンウィンの再出発は新しい音楽の創造をともない、ティントゥンとマ・キンティッの再会は抗日闘争の出発をともなう。

『東より日出ずるが如く』は、複数の女性との愛の遍歴と改心による再生という『愛すればこそ』の枠組を、そのまま使用したといえよう。この枠組に、『愛すればこそ』では芸術が、『東より日出ずるが如く』では史実が肉づけされる。前者の肉づけは適度であるが、後者のそれは厚く、枠組は史実の中に埋もれがちである。このような枠組の重複は、テインペーミンの、長編小説中類をみない。

さらに、枠組内部の愛の類型の類似にも言及しておきたい。『愛すればこそ』の3つの愛と、『東より日出ずるが如く』の4つの愛のうち3つまでがほぼ同型である。類型の第一は、ミョウミンとマ・キンウィン、ティントゥンとマ・キンティッにみられる、青年と4、5才年下の聡明な少女との純愛・「庭師型」である。

マ・キンウィンの竪琴とミョウミンの歌は互いに不可欠な存在であった。ミョウミンはマ・キンウィンの高潔さを尊敬し、マ・キンウィンはミョウミンを、音楽という自分の庭を最も美しく整備できる庭師と考える。一方マ・キンティッは経済的に不自由はなく、容姿はマ・キンウィンほど美しくない。しかし、政治意識が先鋭で、文学芸術に深い造詣を示し、ティントゥンと感性を共有する。ティントゥンは彼女をバラに、自分を庭師にみたて、年若く優秀な恋人を育てることに喜びを見い出す。

庭師が丹精こめて育てた鉄線蓮の花がやがて所有者に持ち去られる……といった詩を作って二人の愛の未来への不安を予見するのはマ・キンウィンである。一方、ティントゥンも、同様の詩的散文をつづり、母親の監視下にあるマ・キンティッとの不自由な愛を嘆く。庭師と庭あるいはバラ、そして鉄線蓮の詩もまた、二作に重複する暗喩であった。

この愛は庭師の裏切りで一方的に中断し、少女に「歳不相応な苦悩」を与える。デイジーにひかれたミョウミンは学業多忙を、マ・ミャフミーに誘惑されたティントゥンは政治活動の多忙を口実に、別れの手紙を出す。だが少女への崇拝の念は保たれる。ティントゥンの視点からのみ語られる『東より日出ずるが如く』で明白に描かれない裏切られた側の気持ちは、部分的全知の視点を取る『愛すればこそ』で説明されている。

控え目ながら気丈なマ・キンウィンは、デイジー、後にはマ・フラティンのもとにいりびたるミョウミンを案じ、待ち続ける。しかし病身の母と盲目の祖母をかかえ、内戦による商売不振で、ついに誠実な中年職人の求婚に応じる。結婚式の前夜、改心したミョウミンが戻り、二人は出奔する。マ・キンウィンの心はミョウミン以上に、困難を乗りこえる強い意志と確信に満ちている。マ・キンティッにさほどの波乱は見舞わないが、ティントゥンへの思いはマ・キンウィンの心情から推し測れる。

第二はミョウミンとデイジー、ティントゥンとウィニーにみられる「上昇指向型」の愛である。女は男に官僚試験合格を期待し、それにこたえない男を捨てる。女は元官僚の美しい娘で英国式家庭環境に育ち、フランクな交際に慣れる。学園の女王のようなデイジーに歌をほめられ、デイジーのピアノと組んでモダンな歌

を歌い、ボートや映画やテニスに興じて有頂天になったミョウミンの求愛に、デイジーは応じない。彼女は世間知らずなミョウミンに、愛と結婚は別、音楽で生活は不可能と告げ、官僚志望の青年との安定した、愛のない生活を選ぶ。

ティントゥンは、進路の定まらない入学当初、官僚試験を受けるかもしれぬ人物としてウィニー一家に歓迎され、学生運動多忙化とともに疎遠となる。ウィニーは何人かの官僚の卵との交際を経て、日本軍将校の妻におさまる。『東より日出ずるが如く』でのウィニーの登場は少なく、早々に過去の人となってゆくが、ウィニーより華やかでドライなデイジーの生活と意見の中に、その同質性はうかがえる。

第三は、ミョウミンとマ・フラティン、ティントゥンとマ・ミャフミーにみられる「背信型」の愛である。それは、青年が誠実な少女への背信意識にさいなまれながらも脱け出せない、大人の女性との愛である。相手は10才以上年上で青年の活動の理解者かつ財政的支援者である。女らしい気配りを示しながらも、女であることを武器に男並みに事業を営み、不幸な結婚の痛みをいやすため、自ら愛を告白して青年をとりこにするが、事業を優先する冷静さを保つ。その資本家的体質を悟った青年はひとまわり成長し、そのもとを去る。前述の各類型内の対応する女性の容姿には差があったが、マ・フラティンとマ・ミャフミーは共に大柄の美人で、きわめて類似する。

ミョウミンはマ・フラティンと同棲して音楽三昧にふけり、デイジーへの失恋の傷心をいやす。彼はレコードや音楽映画の製作を志すが、マ・フラティンは採算の合う見通しのない事業に出資しない。彼はまた、愛人でなく正式の夫となることを希望するが、再婚すれば前夫に財産の半分を譲る取り決めで離婚したマ・フラティンに、再婚の意志はない。

一方ティントゥンは、意のままに記事の書けない新聞社を退職し、マ・ミャフミーの生活援助で政治活動にうちこむ。彼はマ・ミャフミーに地下印刷所建設の出資を求めるが、彼女は返事をひきのばす。そして病身の夫の死後も、世の中にはあなたのわからないことがたくさんあると、ティントゥンの求婚には応じない。マ・ミャフミーの過去は謎に包まれ、出資や再婚に乗り気でない理由も語られない。その空白は、マ・フラティンの言動から埋めることが可能となる。

『愛すればこそ』の3人の女性像は、「東から日出ずるが如く」の3女性の原型であり、それを補完する存在であった。ゆえに50年代の第三の影には、前作の恋愛の枠組と、枠組内の類型の類似があげられる。このような影響について、テインペーミン自身の言及はない。それどころか彼は、後年、『東より日出ずるが如く』がいかなる作品にも依拠していないとさえ述べている。[91] しかも、彼が自作の長編について解説する『私の小説の中の人物たち』[92] からも、『愛すればこそ』は脱落している。なぜ彼は、前作の要素を大巾にとりこみながら、その事実を闇に葬ろうとする異例の冒険に走ったのか。

『愛すればこそ』は前述のように1948～49年、ラングーン刑務所服役中にシナリオとして書かれ、51年初頭に小説化着手、52年末に完成した。着想は、『東より日出ずるが如く』より早い。『東より日出ずるが如く』が1950年から書かれたにせよ、構想だけがあったにせよ、それが『愛すればこそ』に先行することだけは断じてあり得ない。このことを確認した上で、テインペーミンの1978年の発言[93] を示そう。

それによれば彼は、『愛すればこそ』を「忘れるべき小説」とみなし、再版を望む声にも耳を傾けなかった。なぜなら第一に、小説は小説として書かれるべきで、シナリオの小説化は芸術的に質が落ちる。第二に、民族文化の向上をテーマとしつつも青年の純愛を優先的に描いた『愛すればこそ』を、深遠なテーマを持つ他の小説と同列視できないからであった。そして「当時『東より日出ずるが如く』を書き、成功していた私にとって、『愛すればこそ』を重視する根拠は何一つなかった」[94] とさえ述べる。

テインペーミンは、「深遠な」テーマを持つ『東より日出ずるが如く』成功のゆえに、その原型を内包する『愛すればこそ』を失敗作として、自作のリストから抹消した。そこに、50年代の文学と政治における様々な言動に恥じない作品を優先させねばならなかった彼の、焦りがうかがえる。彼が『愛すればこそ』の真価を認識したのは、20年余の後再映画化の話がおこり、手もとにもなかった同書を図書館で借りて読んだ時であったという。[95]

最後に、『愛すればこそ』に原型のない『東より日出ずるが如く』独自の愛の類型、ティントゥンと政治音痴の才女マ・ミンウーの「成熟型」の愛にふれてお

きたい。『愛すればこそ』は、名誉・体面重視の「上昇指向型」の愛、女の経済力に裏打ちされた「背信型」の愛を克服し、名誉も金も介在しない「庭師型」の勝利で結ばれた。それはたしかに純愛ではあるが、男が年下の賢明な娘を手塩にかけて育むという一種の従属関係がみとめられた。

第四の愛は、それを超克したところにある。マ・ミンウーとティントゥンは、互いの相違を認めながら理解しあえる、気のおけない自立的関係である。古典文学を愛する民族主義者マ・ミンウーは、独特の美意識を持ち、荒々しい労働者の絵のバッヂや、見映えのしない国産木綿などを、いかに大義名分のためとはいえ身につける気はない。労働者農民の窮状に同情はするが、いざという時には学問の世界にひきこもる。母性的包容力でティントゥンのあるがままを愛し、恋情を告白して彼を束縛することを避け、心地良い安息の場を与える。ティントゥンは政治や恋愛に疲れた時に限って彼女を思い出し、そのさわやかさに甘える。彼の身勝手な愛は、彼女の死によって報いを受ける。彼は初めて、彼女を最も愛していたことに気づき、損失の大きさに打たれる。その死は、大戦を独立の好機と見る軽々しい冒険主義をしりぞけ、生死の厳粛さを彼に教える。

金も見栄も介在せず、従属関係もなく、価値観の相違を認め、友人と恋人の間を行きつ戻りつしながら成熟していくこの愛は、テインペーミンの以前の小説に原型を持たない。40年代末のシナリオを原型とした「純愛小説」の枠を越えたこの関係こそ、テインペーミンの50年代的恋愛観の到達度を示すものであった。

4．その他の人物にみる50年代の影

『東より日出ずるが如く』の主人公の動揺性には、50年代の分裂や内戦の痛みの影が、そして彼の性格、恋愛の枠組、個々の愛の類型などには、前作の影響が色濃くあらわれた。これらが、この作品の主要人物にみる50年代の影であった。

では、主人公を中心に放射状に連なるその他の人物たちの中に、50年代的要素はどのようにあらわれるのか。まず、モデルの有無は別として架空人物から検討してみよう。彼らは階層も思想も異なる様々な人々から成り、筋の流れに断片的に登場して、その生活と意見を語る。

彼らを大まかに分けると、まずティントゥンをめぐる女性たちの親族縁者があ

る。それは、ウィニーの父でティントゥンの政治活動に鷹揚な理解を示すかにみえ、実は食べることにしか関心のない斜陽の元郡長、見栄張りだが如才なく、娘より水々しい彼の妻、マ・ミャフミーの親友で万事彼女に従属する無邪気な有閑夫人、マ・キンティッの父で少々女性に弱い民族主義的高校教師、その妻で嫉妬深いが進歩的な薬店主、その義姉で彼らの仲や運動を冷静にみつめる頑固な老嬢などである。

第二に、その他のラングーン市民があげられる。それは、ティントゥンの第二の下宿の同居人で、大物政治家や政治家の愛人などを顧客とする売れっ子占い師、ティントゥンに闘争の情報を求め、民族紛争をあおり、活動資金援助を申し出、最後に日本軍のスパイとしての正体を明きらかにする、醜怪で神出鬼没の中年男、学生闘争を支援する奇妙な富豪女系一家などである。

第三にティントゥンの旅先シャン州の人々がいる。それらは、封建支配者の流れを汲む実業家、彼の従妹で愛人でもある中年女性、彼女の息子で進歩的なラングーン大学生、彼を愛する実業家の娘などである。そこには53年の作者のシャン紀行の影響と、封建制告発の意図が読みとれる。

これらは、中流あるいはそれ以上の階層に属する人々を中心とした。その生活基盤を反映した独特の性癖をリアルに発揮する彼らは、テインペーミンが50年代に題材として推した、どこにでも見られる平凡な生活者の範疇には必ずしも属さない。これらの人々も含めて、38～42年のほぼ全階層の思想状況の呈示がこころみられるのである。

第四に、ティントゥンが最初に下宿するカマーユッ地区の住民があげられる。それはティントゥンとよき相棒の進歩的常識人で行事に重宝がられる中年独身男、地区の長老的存在でティントゥンに下宿を提供するやもめの新聞社職工長、たくましい未亡人の揚げ物屋、その仕事を手伝う二人の娘、貧しい馬車屋一家、民族主義の激しさの余り親日に走る床屋などである。

第五に、わずかながら農民が見られる。それはティントゥンの故郷で、日本軍の武器受け取りの秘密活動に協力し、20年代の農民反乱の経験をも持つ人々である。

ティンペーミンが50年代に描くことを主張した普通の人々の生活は、カマーユッ

住民の中に描かれる。彼らの生活を通した喜怒哀楽は新奇でなく普遍性を持つ。しかも彼らは、哀れな、教化すべき無知豪昧の輩ではない。たたかいに疲れたティントゥンを暖かく包む生活者であり、自分たちを代弁してたたかう知職人に期待を寄せる支援者であった。しかし彼らは、たたかいの主体たり得ず、せいぜい協力者どまりで、しかもひとたび天災人災が起これば、まっ先に犠牲が及ぶ弱者であった。ただ、この段階では彼らと闘士たちの溝は顕在していない。

これら架空の人物を量的にはるかにしのぐのが、実在実名の人物である。そしてその多くがタキン党員あるいはそれに近い政治活動家であった。架空の人物である主要人物の周辺にぼう大な実在の政治活動家を配することも、新しいこころみであった。[96] 非実在のティントゥンと実在人物とのかかわりには、作者の恣意が働き、そこに作者とその人物のかかわりを反映した人物観があらわれた。

ティントゥンと直接かかわる実在人物を、執筆当時の作者や社会との関係から分類すれば、第一に50年代には故人であった人物があげられる。戦後ビルマで神格化される悲劇の将軍アウンサン（1915～47）は、ティントゥンの先輩活動家として登場し、軍人として頭角をあらわす以前の、不愛想でいささか変屈な一面が示される。[97] デモの途中官意の襲撃で死亡した国民的英雄アウンヂョー（1916～38）はティントゥンの同級生とされ、ストイックで古風な民族主義者ぶりが語られる。38年当時のラングーン大学学生自治会議長で、39年共産党創立メンバーのバヘイン（1910～46）は、ティントゥンをなにくれなく気づかう先輩として描かれる。

これらの人物ほど有名ではないが独立闘争で一定の役割を果たした故人にも言及される。それは、飾らぬ誠実さとおっとりした人柄で、血気にはやるティントゥンに反ファシズムを説き、作品結末に輝きを与えるタキン党議長タキン・ティンマウンヂー（？～1944）、ビルマ政庁包囲作戦やハンストを指導した自治会副議長で、有能な扇動家でありかつユーモラスな人柄のコウ・フラシュエー（？～1947）、そして、後年カルカッタで抗日訓練を受け、飛行機事故死したアターの、軟弱な英文科時代の横顔などである。これらの登場は、内戦を知らず世を去った英雄への鎮魂歌でもあった。

第二に、50年代反政府軍指導者として健在だった人々があげられる。それは、

CPBのタキン・ソウ（1915～89）とBCPのタキン・タントゥン（1911～68）である。当時すでに一目置かれるマルクス主義の論客であったソウは、食事中も本をむさぼり読む姿でティントゥンに強い印象を与え、後にはマルクス主義の先達としてティントゥンのプチブル性を手厳しく批判する存在になる。タキン・ソウの反ファシズム思想など革命理論における先見性と共に、民族主義と伝統を排斥する教条主義的傾向やインテリ嫌いも浮きぼりにされ、思想家として尊敬できても人間的になじめぬものをティントゥンに感じさせる。一方タントゥンは、ティントゥンに農民問題を説明する頭の切れる冷静なタキン党農民部長として登場する。登場がソウよりはるかに少ないのは、当時タントゥンがマルクス主義者として頭角をあらわしていなかったからでもあろう。

第三は、50年代合法社会にあった人々である。政界人では首相のウー・ヌ（1907～）がティントゥンの敬愛する36年スト指導者として、AFPFL内でヌと対立していた閣僚チョーニェイン（1915～86）が、ティントゥンに読書の助言を与える英文科助手、後には人民革命党指導者としてわずかに姿をみせる。

50年代の非政界人では、文筆家のタキン・チョーセイン（1919～）が、ティントゥンに自由ブロックなどの説明をする労働者協会書記長として、当時は実業家であったタキン・フラペー（1911～78）がフラシュエーの兄でタキン党執行委員として、ティンペーミンと論争中だった作家ダゴン・ターヤー（1919～）が、ティントゥンの羨望の的である貴公子然とした学生作家としてわずかに登場する。50年に実業家となったコウ・トゥンシェイン（1918～）だけが、ティントゥンの親友の一人として、闘争の合間に息抜きの映画やピクニックに同行し、彼を人民革命党に誘い、結末近くにビルマ独立義勇軍（BIA）大尉ボウ・ヤンナインとなって再会し、抗日の意志を示して、彼の通行の便をはかるなど、重要な役割を果たす。

トゥンシェイン以上にティントゥンとかかわるエーグエ（1919～）は、実は50年代に消息が明きらかではなかった。[98] 彼はトゥンシェインと組んで、あるいは単独でティントゥンに接し、剽きんな反面、彼とマ・ミャフミーの関係を見ぬく鋭さも持ちあわせる。実在人物中ただひとり成長の軌跡を示し、やがて軽々しさは失せ、慎重な闘士となって、人民革命党でティントゥンを指導し、結末近くで

BIA小尉として再登場して彼の窮地を救う。

ぼう大な実在人物の中でティントゥンに直接かかわりを持つ者は、実は架空人物ほど多くなく、その性格の顕示も一部を除けば、むしろ好意的ですらあった。実在人物はむしろ、彼らの理想や主張をもりこんだ声明や、演説や、議論での発言など、記録的部分で本領を発揮する。それらを通してテインペーミンは、当時の社会主義思想の到達度や民主主義のあり方を示し、死者への鎮魂のみならず生者への教訓となした。

架空人物と実在実名の歴史的人物の間に位置するのが、自伝的人物である。彼らは冒頭のティントゥンの生いたち部分を中心に登場する故郷の村の親戚や幼ななじみ、そしてティントゥンの両親などである。これらは作者の自伝などから、ほぼ実在人物であるとみとめられる。[99]

戦前の短編にも出身地を舞台とするものもあるが、[100] テインペーミンが自己の生いたちや肉身の周辺を語ったのは「母」(1948)[101] が初めてであった。そこに描かれる彼の父親のエピソードは、『東より日出ずるが如く』にも脚色なしで用いられる。それらは下級官吏としての悲哀、息子に託した果たせぬ夢、政治活動に走った息子への怒りと嘆き、そして不満のはけ口としての飲酒と暴力などであった。そうした父親の言動が『東より日出ずるが如く』では時代の産物と理解され、許されるかにみえる。ティントゥンは父の墓前にぬかづき、「ああ、父一人の罪であろうか。時代の罪、体制の罪だ」[102] と、生前父を深く愛せなかった非を悔いる。このようなものわかりのよさは、「母」においては見られぬものであった。

しかし、テインペーミンの父親に対するわだかまりは、50年代に溶解していたわけではない。彼は幼時より母に暴力をふるう父を目のあたりにし、母の不幸な結婚に同情をよせた。父が1940年の母の死を待ちかねたように再婚したことは、その遺恨をさらに増幅させた。彼はその地を15年も踏まず、55年の再会も苦々しいものであった。56年11月号掲載の『東より日出ずるが如く』で彼は、57年まで生者であった父を殺し、母を復活させた。

「ああ、世間が死者を許す如く生者をも互いに許しあえれば如何によかろう。どんなに恨みつらみが減少するであろう。」[103] 生前の父の歯に衣きせぬ毒舌や

吝嗇さに傷ついていたかもしれぬ弔問客たちが、父の善行をあげて供養するのを聞くティントゥンの思いは、死ぬべからざる者が死に、生くべからざる者が生き残ったことへの作者自身の概嘆であった。

父の暴力は母子を密着させた。家事上手で、つましいながら施しには気前良く、弱者をいためつけず、政治を理解できぬまでも息子のすべてをうけいれる母に、テインペーミンは理想の女性像の一端を見いだしたのではあるまいか。[104] 48年の改名も母への追慕によるものであった。[105] 「母」の中で、高校時代、遅れて帰省したテインペーミンを無言で迎え、牛乳をわかしてさし出す母の姿は、ティントゥンが父の葬儀に帰省する場面に、そして死の直前テインペーミンの結婚について意見を述べた母の姿は、父の葬儀後の母子の語らいの中に、再生された。[106] 父への憎悪は母への思慕の裏返しであり、父殺しの願望は小説の世界で成就された。[107]

自伝の使用は、ティントゥンが基本的にそなえていた民族精神を強調し、その生いたちに現実性を与えた。ティントゥンと同様の出自で、彼よりはるかに作者に近かった『ストライキ学生』のニョウトゥンの背景は、ティントゥンほど詳しく描かれない。ティントゥンに自伝を重ねながら作者の分身とせず、「母」とは異なる側面から出自を確認し、自己の客観化をこころみる作業は、ティンペーミンの人生半ばにして可能となったのである。

ところでティントゥンは、その動揺性やさめた視点から作者の分身でないことが強調されるにもかかわらず、その情勢認識は卓越し、作者のそれに重なる部分もみとめられる。[108] ティントゥンの先輩活動家として作者自身が登場するのは、主人公と作者の区別を明確にするための布石であった。テインペーミンの詳細な自画像もまた、この作品で初めてあらわれたこころみである。

ティントゥンとテインペーの出会いは1938年暑期、カルカッタから一時帰国したテインペーが油田労働者の現状報告をする場面に始まる。「背は高からず低からずで、ガリガリに痩せている。顔は笑っているわけではないが、大きな二本の前歯がくっきりのぞく『出っ歯』であった。眼鏡がキラキラ輝いており、その眉の太さときたら太い眼鏡の枠をもはみ出すほどであった。これがテッポンヂー・テインペーだったのである。」[109] つづいてティントゥンがカマーユッ地区の労

働者の状況について発言し、二人は近づきになる。そのあと、12月の学生集会や、デモ行進成功を祝う集会での来賓挨拶を通して、他の指導者同様テインペーミンの主張が直接伝えられる。(110)

テインペーミンの自画像は、ティントゥンの小耳にはさんだ噂にも描かれる。39年1月の父兄集会の帰途、彼はバセイン派タキン党員らしき人々の次のような会話を聞く。

「『そうとも。英語の出来るインテリタキンが、下積み期間もなしで、すぐ本部執行委員にのしあがるなんてのはよくねえ傾向だ。だいたい秩序ってものがねえ。大卒タキンの中でも、俺が一番嫌いな奴はテッポンヂー・テインペーさ。奴は態度がでかすぎる。うぬぼれ屋さ。わしら古参タキンを馬鹿にしておる。どこかの集会で奴が、わしら古参タキンを学生ほど規律正しくねえとかなんとか批判したって言うじゃねえか』

『そのうち我がラングーン管区我等ビルマ人協会としちゃあ、奴を何とかせにゃなるまいぜ。ところでな、同じ英語教育を受けたインテリでも、タキン・タントゥンは人間のできがいい。つきあいもいいし、仕事もできる。』

『ああ、タキン・タントゥンはつきあいのいい男だ。あいつらのようなへそまがりじゃねえ……』」(111)

テインペーミンはここで、タキン党内部のインテリと古参者の矛盾、さらにインテリ内部の大学出身者とそれ以外の者の矛盾を示しながら、古参者の視点による自画像を描き出した。さらに彼は、ティントゥンの視点からも、自画像を描く。39年2月、H. G. ウェルズ歓迎会に同行し、ウェルズの作品を賞讃するティントゥンにテインペーは、進歩的文学の意味がわかっていないと応じる。

「コウ・テインペーのこの発言は、ぼくの崇拝するウェルズ氏ならびにその作品を読んできたぼくへの侮辱を意味した。この男はこんなふうにあまのじゃくだから、一部で憎まれるのだなとぼくは納得した。たしかにコウ・テインペーの性格には、ぼくから見ても好感の持てる面が多々ある。それに、ぼくは彼の作品には一目置いている。しかし彼は相当な自信家であった。ぼくはその点が気にくわなかった。おまけに、ことさら他人に逆らう発言をしているように見える。他人を故意に手厳しく批判するのは、自分の名声を上げたい余りであるようにも思え

る。」[112]

反発するものの彼は、テインペーの主張の道理に納得し、文学への見方を変えてゆく。反発しつつテインペーの主張をうけいれるパターンは、結末でも用いられる。日本軍の武器投下を待って徒労に終わったティントゥンは、テインペーに愚痴る。

「『日本には失望しましたね』

コウ・テインペーは同情の素振りを示さない。その態度と口吻には、皮肉と厭味がたっぷりこめられていた。

『ハッハッハ、背後に回られてから野盗と知るってやつさ。いいことだ、いいことだ、ハハハ。やられてみりゃいい。やられりゃ経験になる。苦々しい経験にね。日本がビルマ独立闘争資金に二十万くれるって話だったろう。いくらくれた？せいぜい二万がいいところだった。日本が武器投下するって話だった。それがだ、君の所だけじゃない。モウゴウも来なかった。ミンブーも来なかった。タキン・ミャやタキン・ターキンやタキン・バトーも同志同様さ。がっかりしていた。本当はだね、ティントゥン同志、落胆な正道にあらずさ』

その話し方は不遜であった。多くの者が、コウ・テインペーを自信過剰の傲慢な男だと言うが、本当にそうだとぼくは思った。彼には賞讃すべき能力があるが、それだけに憎々し気な面も多い。」[113]

こうしてテインペーはティントゥンに日英二つの敵論を説き、それはティントゥンの中に浸透するという設定である。一部で几帳面さやめんどうみのよさもうかがえるものの、[114] それにもまして、あまのじゃく、自信過剰、傲慢な自画像が描き出される。歯に衣きせぬ率直な批判精神は、実は他者の証言にもみられるものであった。

「彼は大声で笑いながら、それとなく他者を批判するのが常であった。批判された側が気色ばんでも、彼は笑いを絶やさず、気を悪くした様子もみせず、柳に風というが如く受け流した。」[115]

「先生は、他者も自己も同じように批判した。他者が（口であれ文であれ）彼を酷評しても、怒らず冷静にうけいれた。批判という武器の意味を理解して、有効に用いた人物は、（ビルマ文学界において）テインペーミン氏一人であったと言

えよう。」[116]

『東より日出ずるが如く』にみられるその自画像は、作家としての資質に必要とされる旺盛な批判精神が、当時の一部の人々の神経を逆なでしていたことをテインペーミンが十分承知していたことを物語る。こうした個性は、立場を越えた広い交友関係をも育てたが、1300年闘争の学生スト早期解除のような独走の因となった。彼の評価をおとしめたものは、自信過剰の傲慢な性格よりむしろそうした独走によるものであることまで、『東より日出ずるが如く』は言及しない。それは、50年代になお克服されざる彼の弱点でもあった。[117]

『東より日出ずるが如く』における主要人物以外の架空人物は、38～42年の多様な階層の意識を反映する役割をになったが、一部に作者の50年代の問題意識をも浮きぼりにした。他方、実在の政治的人物は、闘争の栄光を強調するために効果的に用いられ、自伝的人物像や自画像は、自己客観化の作業の一環として、いずれも人生半ばにおける作者の意識を鮮明に反映した。

最後に、テインペーミンにとっての、『東より日出ずるが如く』の50年代的意義を確認しておこう。この作品は、ティントゥンが過去を回想する手記の形式をとる。しかし手記の執筆時点を明示する記述は、「二十五才の今この物語を始めるにあたって……」[118] と、「現在に至るもぼくはまだ心底政治にどっぷりつかる腹づもりがない……」[119] の二ヶ所のみである。文中の「今」「現在」とは、一体いつのことを言うのであろう。彼は作者の３、４才年下とされるので、その25才の時点は1942～43年である。作品は42年７月頃で閉じられるので、42年８月以降から43年あたりが執筆開始時ということになろう。しかしこれは、現実にはなかなか困難な設定と言わねばなるまい。

というのは、文学史上も暗黒の時代といわれ、言論統制と紙不足に悩んだ日本軍占領下のビルマで、政治的にさめた眼を持つ彼が危険な抗日秘密活動に従事しながら手記を執筆できる可能性は、きわめて低いからである。ひとりの作家志望の青年がこの長い物語を書く時間的、物質的ゆとりと、精神的冷静さを回復するのは、どうしても50年代に入ってからと考えるのが妥当でなかろうか。テインペーミンは、現実に不可能ながらいかにも現実らしく見せかけた形式を用いて、巧みに読者を虚構の世界にいざなった。

非現実的前提が現実的な迫力を持ったのは、1938年から42年のファシズム侵略前夜のビルマについて語られた史実の重みと、それを根拠とする和平と統一への強い渇望の故ではなかったか。

「当時、様々な、あやまちがあったと思います。私としてはそのあやまちに、指導者の立場からかかわり、あやまちをおかしたということを認めます……当時始まった分裂のために内戦になりました。内戦のおかげで、ビルマの宝である人々が、人民大衆の生命、財、家屋が破壊され失われました。」[120]

「我々も政治の向上につとめ、人民のために尽くしている者であると考えていただきたい。そうした発想が生じれば、反乱している、内戦をおこしているといわれるかの人々もまた、かって我々と共にイギリス帝国主義とたたかい、ファシスト日本とたたかい、我々と共に国家の独立獲得に努めたという栄光に思い至り、そうして、団結を望む気持ちが生じるでありましょう。」[121]

分裂をおしとどめられなかった非力への痛恨、史実を根拠とする統一回復への確信を示すこれらの発言は、『東より日出ずるが如く』連載末期、1956～57年のテインペーミンの国会発言の一端である。それは、この長編の連載中かたときも彼の脳裏を去らなかったものが、統一と和平への渇望であったことを物語る。

50年代のビルマ政治の勝利なきたたかいの中で構想され、執筆された『東より日出ずるが如く』は、「革命時代」の軌跡をたどる作業の一環として、1300年闘争の「真実」とファシズム侵略前夜のビルマを再現し、反植民地・反ファシズム闘争の栄光の記念碑となった。その人物像にも、多様な50年代の影が投映されたが、なかでも全編をおおう50年代の影といえば統一と平和への渇望であったろう。テインペーミンは、1938～42年を虚構として再現することによって、統一修復への手掛りを示そうとした。『東より日出ずるが如く』は、まぎれもなく50年代のテインペーミンの激動の産物であったといえよう。

おわりに

「私にとって文学は政治です。政治は文学です。両者を分離することは不可能です。私の政治信念のゆえに、私の文学は鋭く、私の文学の鋭さゆえに、政治活

動が徹底するのです」[122] と、彼が50年代に語ったように、テインペーミンにとって文学と政治は不可分の補完関係にあった。

『東より日出ずるが如く』を書き終えた時、彼は「私の生涯の気がかりな仕事が完成し、肩の荷をおろしたようにうれしい」[123] と感じたという。テインペーミン自身はこの長編の50年代的意義に言及していない。ただ、その追悼集には、「彼の統一と和平への渇望は、この『東より日出ずるが如く』を執筆することによって、当時ある程度鎮められたと思う」[124] という注目すべき記述がある。もしそうであるならば、『東より日出ずるが如く』もまた、彼の政治と文学の関係を最も端的にあらわした作品の一つと呼ぶことが可能となろう。

テインペーミンが、50年代の8年間をこのぼう大な虚構と共にすごしたことは、進展せぬ統一と和平、深まる民衆と政治との断絶へのいらだちを解消したのであろうか。それはむしろ現実を見えにくくし、見果てぬ夢だけをいたずらに増幅する作用を及ぼすだけではなかったか。とりわけ反ファッショ闘争の栄光への過度のこだわりの陰に、厳粛な事実が葬り去られていきはしなかったか。

『東より日出ずるが如く』完成後、ビルマ政治にもテインペーミン自身にも、さらにめまぐるしい転変が訪れた。58年のAFPFL分裂、第一次軍政、60年の民政復活、62年から四半世紀にわたる軍事独裁。58年、ボウタタウン紙を創設し、本格的ジャーナリストとして出発した彼は、筆による政治発言の場を拡大し、小説から政治性を消してゆく。さらに彼は62年、ビルマ社会主義計画党に入党し、規律ある組織と「近代」思想による「理想社会」の建設、いいかえれば軍主導の和平と強大な管理社会の建設に加担するに至った。

こうしたその後の彼の行動に示唆的な記述も、『東より日出ずるが如く』から取り出せる。例えば、1942年、抗日のためラングーンへむかうティントゥンと、BIA大尉ボウ・ヤンナインのヒンダダにおける再会である。ここには、抗日のためインドへむかうテインペーミンが BIAと出会い、旧友と旧交を暖めた体験が使用されている。[125] ヒンダダにおいて、ヤンナインの軍事的政治的手腕により、BIAと地域住民の協力体制で敷かれた、英領以来初のビルマ人の手になる行政について、以下のように評価が与えられる。

「この戦時、しかも政治権力交替期に、人民の生命財産をかくも守り、事態の

混乱を食い止めたのは、むしろ賞讃に値するであろう。戦乱期にあって人心は戦々恐々とする。心騒げば思考は退化する……ビルマ独立軍は、そうした人心の安定にも一役買っていた。」[126]

57年8月号9月号掲載部分に収録されるこの記述は、BIAの人民に奉仕する軍隊としての可能性を強調した『ビルマで何がおこったか』(1942) の記述[127] をおおむね踏襲するものである。軍が、反ファシズム闘争における統一戦線の重要な一翼として、そのままテインペーミンの心に輝き続けたとすれば、そこから「人民の軍隊」による和平と、それに守られた左翼統一・社会主義社会の実現という図式が導き出されても不思議はない。かつて暴力による権力奪取を否定して共産党と袂を分かった彼が、「暴力装置」としての軍を活用して和平を実現し、理想社会を建設しようと考えるに至ったとするならば、それは文学的幻想の皮肉な反作用とでもいう他あるまい。

「理想社会」は、なによりも弱者である民衆を救済するはずのものであった。テインペーミンは、戦後政治の中で、内戦の最大の犠牲者である民衆の苦しみに言及し続け、文学の中でもそれを題材にすることを主張し続けた。しかし50年代の民衆像は、『東より日出ずるが如く』の民衆像のような闘争への協力者としての立場を越えず、「近代」思想に導かれ、規律正しく組織されるべき存在の域を出ることはなかったと考えられる。そうした点でも、『東より日出ずるが如く』はテインペーミンの50年代の意識を反映し、その60年代の言動の意味を解く鍵となる作品であった。

注

(1) 歴史小説は短編「勇士ソークン」(1933 B-27所収)、「戦士」(1935 B-20所収)。また長編「ティーターピョン」(1968 B-23) は、1952年頃を背景にしたシナリオを小説化したもの。

(2) 時代設定の意味についてはJ-9下巻とJ -11等の解説でふれた。

(3) B-24 P.43 でテインペーミンは、1950年頃から54年頃にかけて書いたと述べ、B-28 P.54では1950年から書き始めたと述べる。彼の言葉どおりなのか、構想だけがその頃存在したのか、54年に原稿が完成していたのか明確ではない。が、本文で後述

するように、彼の政治活動の多忙や海外渡航などを理由とする何回かの休載があるので、最初から必ずしも原稿が完成していたわけではないと考えられる。

(4) J-9とJ-11の他にJ-8とJ-10もある。

(5) 作品名など詳細はJ-7であげた。ただし、作品によって執筆年と発表年、あるいは口頭発表時と収録時にずれのあるものもみられる。J-7は執筆時のわかるものはそれを優先したが、本稿は基本的に発表時を優先し、執筆時とのずれが明確である場合は必要に応じて言及する。また、J-7で脱落していた作品もその都度追加する。

(6) 1944年抗日のため軍、共産党、社会党を中心に結成。46年10月に共産党が脱退して以後、実質的には社会党が牛耳っていた。

(7) 1930年創設。テインペーミンは1933年加盟。

(8) 社会党の前身。1939年頃タキン党内部で結成された秘密組織。テインペーミンは41年頃加盟。その詳細はJ-11参照のこと。

(9) 1939年創設後いったん壊滅状態となり、タキン・ソウを中心に再建。テインペーミンは44年入党、45年8月書記長就任、48年3月離党。

(10) J-7年譜P.31 1950年の欄に、評論「彼らの見方一率直な批判」(Dhadinzoung誌3月)、「ビルマへアメリカの愛の援助」(Myanmar Alin紙9月10日)と、その他として「ダンゲへの書簡」「世界平和勢力とビルマ」を追加したい。

(11) 1899年生まれ。1922年CPI入党。中央委員、政治局員など歴任。1946～51年にはボンベイ立法評議会議員をつとめた。ダンゲへの書簡はB-14 P.441～518に英緬両文で収録。

(12) それについては J-5参照。念のため書簡における概要(B-14 P.470～490)を示せば、テインペーミンが45年のインドから帰国時にCPIから持ちこんだ改良主義を、CPIが46年12月になって批判。テインペーミンは責任をとって再学習のため6ヶ月休党。この期間に、BCPの左偏向を認識。47年4月自己の見解を中央に送るが握りつぶされる。47年7月、アウンサン将軍暗殺後 BCPが再びうけいれたCPIの方針に対する彼の見解も無視されたため、彼は偽名で党外の新聞に見解を発表。休党後復帰することになっていた中央委員の資格を剥脱される。48年1月のビルマ独立後CPIから武装蜂起を示唆する指令が入り、テインペーミンはそれを未然に防ぐ工作に失敗し、3月26日に党外の新聞に離党声明発表。3月28日BCPは非合法化

され、内戦の火ぶたが切られた。

(13) B-14　P.482

(14) B-14　P.489

(15) B-14　P.489～490

(16) KNDOは1947年創設のカレン族の武装組織カレン民族防衛機構。48年8月からビルマ各地を占拠しはじめ、49年1月非合法化。

(17) 1946年2月BCP中央委員タキン・ソウが改良主義を批判して離党し、3月赤旗共産党（CPB）を結成。それ以後BCPを白旗共産党とも呼ぶ。タントゥンは46年8月、テインペーミンがAFPFL副書記長に就任してBCP書記長を辞任して後、BCP書記長に就任。CPBはすでに46年7月、武装蜂起し非合法化されていた。

(18) 人民義勇軍（PVO）は45年12月、アウンサン将軍が創設。再編ビルマ軍に入れなかった元兵士で結成。48年6月、地下活動に入った部分を白色PVO、地上に残った部分を黄色PVOと呼ぶ。

(19) B-14 P.505

(20) B-14 P.515～516

(21) B-20 P.363～P.403にも収録。

(22) 学習は方針の学習のみで、「ソ連邦共産党史」を読んだことのない中央委員や、対立物統一の法則を学んだことのない政治局員がいると述べられる。(B-14 P.515)

(23) B-5の序によれば、インド時代に入手した英語文献に依拠したものである。なお毛沢東の教えを正確に伝えず改良主義的歪曲があるとの批判もB-32 P.66～67にあり。

(24) B-14 P.514

(25) ビルマ世評は49年10月の第一回大会で、同年4月にパリとプラハで開催された第一回世界平和擁護大会決議を承認。50年3月ストックホルム・アピールに呼応して原子兵器反対署名活動をするも、50年6月の朝鮮戦争では一部組織の国連に侵略反対打電、パンフ配布などの活動にとどまったという。(B-14 P.580～582) 議長はタキン・コウドーフマイン（1875～1964）。

(26) B-14 P.551～552。世評の活動報告「世界平和勢力とビルマ」（B-14 P.545～564に収録）

(27) 「ビルマへアメリカの愛の援助」B-14 P.593～601

(28) B-14 P.563

(29) 評論のうち3編は2ヶ月にわたって連載。そのうち「勝利の地を踏めば王になる」(Thwethauk誌10月、11月) についてはJ-2でテインペーミンの民衆観に関して貴重な指摘がある。

(30) 「新聞と自由の権利」(Thwethauk誌9月)。B-26 P.93〜102に収録。

(31) 「世界人口について」(Thwethauk誌12月) P.3〜5。

(32) 「さらに広範な世界平和の統一行動」(Kyaw Lin Press 4月) B-14 P.565〜589に収録。3月に開催されたビルマ世界平和評議会中央委員会・ラングーン県委員会合同集会における副議長による中央委員会報告。

(33) B-1 P.90〜92によれば、議長はアウンタン、書記長はタキン・チッマウン、組織強化のためボウ・ラヤウンの投降PVOとテインペーミンを迎え、何度も談合して基本路線を作ったという。アウンタン (1916〜69) は、アウンサン将軍の兄で1945年社会党入党。49年、社党の内紛腐敗とAFPFL私物化に失望して離党。51年2月、AFPFLのアウンサン生誕記念挙行に将軍の名を利用するなと抗議し、AFPFLも除名になっていた。タキン・チッマウン (1915生まれ) は、元社会党副書記長、全ビルマ農民組織書記長、労農党政治局員。ボウ・ラヤウン (1911生まれ) は、元白色PVO副議長で1949〜50地下活動をしていた。

(34) B-1 P.92〜93によれば、労農党のタキン・ルィン、タキン・チッマウンが、各々議長、書記長に就任を希望するというセクト主義を出したためとされる。

(35) B-1 P.93-94によれば、団体はPVO、我等ビルマ人協会で、その他は個人加盟。会長タキン・コウドーフマイン、議長アウンタン、副議長タキン・トゥンオウとボウ・ラヤウン。タキン・トゥンオウ (1907生まれ) は1930年我等ビルマ人協会加入、戦後同協会を再建。

(36) B-1 P.94〜95によれば、政府、労農党、反政府軍から妨害があり、反政府軍支配地域では投票ボイコット、メルギーでボウ・トゥンセインら2名が選出されたのみ。ラングーンでは開票前日AFPFLが票を盗んだという噂もあり、地方では野党候補の逮捕、行方不明、殺害、賄賂による出馬断念など「民主々義にあるまじき行為」が横行したという。

(37) テインペーミンは48年、文学の階級性を主張したが、49年、新しい文学を創造する

進歩作家の中で、ダゴン・ターヤーとそのとりまきを、難解新奇な形式を用いるのみで内容は新しくないと批判。ターヤーは、新しい形式こそ新しい内容を生むと反論。ターヤーについてはP83.参照。

(38) B-26 P.90 「新文学に関して（ダゴン・ターヤーへの回答）」（Shumawa誌11月）

(39) B-30によれば、誠実な中年独身職人ピョンチョウを年輩の妻子ある金持男に変え、大学生ミョウミンの初恋に反対する小父たちに最後で後悔させるなどの改変があった。この改変をテインペーミンは、第一に読者の空想の中に生きる小説と、観客の視覚聴覚に訴える映像芸術との相違、第二に読者と観客の知的水準の相違、第三に人物を思いのままに動かせる小説に対し、映画では必ずしもぴったりの配役が得られないことによるものと理解し、小説化によって主張を貫こうとした。(P.38～39)

(40) B-20 P.407～434にも収録

(41) 雑誌掲載評論のうち、2ヶ月連載一編。J-7 P.31の1952年の欄に小冊子「人民統一党中央委員会決議」を追加したい。52年3月27日発表。（B-14 P.603～630収録）

(42) 右派の我等ビルマ人協会は52年に連合脱退。左派も一枚岩でなく、アウンタンを含めて暴力革命に心情的にひかれる者が多くテインペーミンと対立したという。（B-1 P.108）ただしテインペーミン自身によれば彼は平和革命唯一論でなく自衛のための暴力に限り認めている。（B-14 P.616）

(43) テインペーミン側の資料はなくアウンタンによれば、PUP結党宣言を発表する前に、テインペーミンが党名や党旗を使用してカンパ集めを命じ、以前からテインペーミンに不信であったアウンタンの部下が訣別を勧めて、アウンタンはPUP加入を思いとどまった。テインペーミンが人民和平連合廃止を一方的に宣言したので、アウンタンが、テインペーミンが脱退しただけであって、連合は存続することを宣言した、という。(B-1 P.119～110)

PUPはテインペーミンによれば、白色PVO投降者を主力とする。世界を帝国主義勢力と反帝勢力に二分して、当面新民主主義戦線を結成し反帝反封建の民主主義革命をめざす。戦線は第一に、新民主主義を目ざす者どうしの争いをやめ、第二に、問題に応じて共闘し、第三に新民主主義をめざす政党間の協力委を結成し、第四に大衆組織を一本化し、第五に明確な形で統一戦線を結成するという五段階を経て実

現するものとされた。(B-14 P.607～608)

(44) 上述の統一戦線結成の前提として、即時停戦と以下の5項目が提案された。第一に、政治犯釈放、弾圧法停止、全政党合法化などによる民主主義的権利の保障、第二に反乱者を含む政党や少数民族代表の参加する人民和平連合政府の結成、第三にその政府のもとで国軍と反乱軍の合併再編、第四に政府に参加する党、個人、少数民族の協議で一致点による路線を決定、第五に意見の相違を武力で解決せず公正な選挙を実施し審判を受ける。(B-14 P.604～605)

(45) B-14 P.605

(46) それが1935年で結ばれたのは、この次期までウー・ポセインの芸能に進収の気風が存在し、以降はその存続に重点が移ったためという。(B-9 P.89)

(47) 章だてはあるが、58年発行の単行本に見られる章題はない。各月の連載量は章だてと無関係で、筋の流れへの配慮もなく章の中途で切られ、章の表示のない号もある。

(48) Myawaddy vol.1 No.11 Sep.'53 P.211
それにもかかわらず、54年4月9月号の目次の分類では小説でなく評論の項に入れられる。

(49) J-7 P.32の1953年の欄に小冊子「人民統一党中央委員会報告」を追加したい。53年7月開催の同党第二回中央委員会における報告。B-14 P.631～656収録。

(50) J-7 P.32の1953年の「スターリンと私」(Thwethauk誌4月)に、「5月」を追加したい。2ヶ月連載である。

(51) B-10 P.24

(52) B-14 P.654

(53) B-14 P.640. P.653などで、53年の国内合法政党に関して分析。まずAFPFL政府について、経済的軍事的に1、2年前より優勢だが、農・工計画は官僚主導型で、民衆への配慮なく、KMT侵略激化で、中立、反帝、親帝の間を揺れるとみなす。政府を反帝勢力にひきいれるための鍵が左翼の団結で、社会党の進歩的部分を含めて、左翼小児病的セクト主義におちいりがちな労農党、社会主義に理解を示しつつある我等ビルマ人協会、マルクス・レーニン主義の人民党、組織性を欠くが進歩勢力の人民和平連合等との同盟、可能ならば合併、一党化を主張。

(54) B-14 P.654～655

(55) B-14 P. 655～656

(56) B-14 P. 632

(57) B-11

(58) 封建藩主ソーブワによる統治。52年に廃止が予定されたが、完全に実施されたのは59年。

(59) B-17 P. 9 なお同紀行はB-17 P. 9～117に収録。

(60) 学生スト解除と作者の関係については、J-9の下巻解説を参照。

(61) 1937年よりナガーニー・ブッククラブが反植民地思想の啓蒙を目的に発行。大戦で停止。

(62) 執筆者は、コウドーフマイン、アウンサン、ヌ、ソウ、タントゥン、レーマウン、バスエ、タン、フラペー、チョーセイン、テインペー。著書執筆を依頼されたテインペーミンが、「政治・和平活動と連載」で多忙のため、執筆のかわりに編んだという事情もある。(B-12 P. 7) 38年にベストセラーになった彼の小冊子「印緬紛争」が修正意見「再考」と共に収録され、そこで同冊子が彼なりにマルクス主義的観点で事件を分析したが、英帝対印緬被抑圧者、インド人資本家対ビルマ人の二矛盾中後者の記述に重点があったと反省。「再考」と「序」は53年12月15日付。

(63) B-12 P. 7

(64) 「人民統一党路線再確認」 (B-14 P. 658～695収録)。B-7 P. 32の54年の欄にも追加したい。そこで彼は当面の危機を、KMTとその背後にある米帝の侵略、ビルマの中立を脅す米・パキスタン軍事条約の二点とし、KMTとたたかう反政府軍を攻撃しないよう政府に訴える。また政府は、英米を過大評価し、東欧との交流に帝国主義の承諾を必要とし、官僚主義に毒され、国内革命勢力を主な敵とすると批判している。

(65) ムルク・ラージ・アーナンド作チョーアウン訳のインド小説『クーリー』の序。B-26 P. 115～120に収録。B-7の54年の欄に追加したい。

(66) B-17 P. 123 序。同紀行はB-17 P. 121～225に収録

(67) B-22 P. 285「生死の哲学」 (1964 Botahtaun紙7月10日 B-22 P. 285～289収録) 50才をむかえるにあたって、40才誕生日の招待状を回顧したもの。ビルマでは10年毎を節目と考えるが、テインペーミンは50才になった時催しをおこなっていない。

40才を迎えたことが彼なりに重要な意味を持ったようである。

(68) 各々Shumawa誌6月、Mywaddy誌7月、Shumawa誌9月掲載し、B-20に収録。

(69) 「作家と和平」B-19 P.137～144に収録

(70) NUF結成の経過についてはB-1 P.113～114とB-32 P.100～110に詳しい。イエボー・フラミョウによれば共同綱領は（1）反乱軍と政府の会談による停戦（2）人民民主主義（3）民族経済向上。(B-32 P.108) アウンタンによれば、これに民族団結と世界平和擁護を加える。思想的に寄り合い世帯で、当初全野党包括をめざすが、旗上げ前に民主党（党首タキン・バセイン）が脱け、結成されたばかりの正義党（党首ウー・エーマウン）が加入したが、同党はその後争いの種をまき、NUF低迷の一因をもたらしたという。(B-1 P.113) NUF（ビルマ名Pyidaungzu Myanmar Naingngandaw Amyodha Nyinyutye Tatpaungzu略称パマニャタ）の参加団体は、我等ビルマ人協会、人民統一党、人民和平連合、労農党、ビルマ労働者協会（BTUC）、農民統一協会、人民青年組織、正義党、モン民族協会、カレン族指導者マントゥンインはじめ個人、大衆団体。結成後、平地チン族協会、青年隊、ビルマ鋼鉄党、ビルマムスリム協議会などが加入。

(71) B-17 P.229～322に収録。

(72) B-13。短編集に収録されていない。

(73) 「民族の姿が見える文学」掲載は翌年3月、B-16

(74) B-16 P.18

(75) B-16 P.20 これらの主張は、49年の人民の中に入れというそれと一見類似するが、49年のテインペーミンは、人民のたたかいを描かない作家を批判して、人民の苦しみの根源と解放の道筋を示し人民大衆を指導する人民文学を主唱した。(B-22 P.99～103)

(76) 56年1月4日付のMyanmar Alin紙。B-14 P.696～704に収録。彼はビルマの独立を、国民が主権を手にして好みの政治体制を作る展望ができた、つまり政治的独立を獲得したにすぎないが、経済的・軍事的に帝国主義の紐帯を切る権利と可能性を獲得したと評価。この独立の評価をめぐって統一が崩壊して8年。地上地下両左翼は分裂粉糾しつつも経済的軍事的文化的に帝国主義の影響を脱する闘争を続けた

と、両勢力の一致点を確認。そして政府の対英軍事条約廃棄、スターリングポンド地域離脱、英系企業国有化、一定の土地改革など軍事・経済的主権行使や、平和五原則、反核、軍縮、中国承認などの外交を評価。そして官僚機構腐敗、反人民的弾圧、与党内のセクト的分裂は帝国主義介入の口実を与えると警告し、全人民の団結のみが独立8年の新人生建設の鍵と説く。

(77) アウンタンによれば、NUF結成時から生命の危機にかかわる類の妨害があり、選挙戦に入るとさらに激化。与党の村落自衛組織（ピューソーティー）による暗殺も発生。AFPFLのタキン・ティンは「殺人できないようでは政治活動はできない」とさえ豪語。AFPFLはNUF支持者を有権者名簿から落とし、選挙区割りを変更し、金と武器を駆使。得票はAFPFLが180万、NUF130万、その他の野党40万。(B-1 P.116～120)

(78) イエボー・フラミョウによればテインペーミンは、自分の出身地ブダリンと妻の出身地ピャーポンの二地区から出馬しようとしてNUF下部から苦情が出、ブダリンから出馬したという。(B-32 P.85)

(79) AFPFL個人加盟のウー・ヌが内閣を出たことで、社会党員のみの内閣となった。

(80) B-15に収録。

(81) B-15 P.17

(82) A5版700頁余は、第二次大戦までが約50頁、45年から49年が約390頁、50年以後が約260頁から成る。

(83) B-14 P.3

(84) 8月の作家協会定期大会では、第一に近年の傾向として芸術至上主義は減少し、人生を反映したリアリズムが増加。社会変革を指向するリアリズムも登場するが芸術的に未熟で扇動文学の水準にとどまると批評。第二に協会の活動について、政治的立場を越えた団結は比較的成功。前年開催を決定した文学交流会の不開催、前年のアジア作家会議の成功の不浸透などを改める方向をめざすと述べる。(B-22 P.17～P.21) 57年11月の文学者の日の挨拶では、作家の権利について、作家は執筆だけで生活できない現状だが、執筆の目的は金でなく民衆の利益だと、民衆と共にある「文化労働者」としての立場を強調。(B-22 P.22～27)

(85) 57年首相に復帰したウー・ヌの所信表明演説に対するNUFテインペーミンの3月

5日における代表発言で、B-15 P.81～105に収録。第一に、民主主義では多数派が少数派を抑圧することなく対等な論議が保障されるべきだが、AFPFLは野党提出議案に論議の機を与えず、野党議員への個人攻撃を加える。思想信条の相違を越え民衆全体の利益を優先すれば与野党の合意は可能だと、月一回の与野党指導者会談を提案。第二に、国の宝たる青少年の教育は国家建設の重要な一翼で、とりわけ科学教育は労農に奉仕すべきと主張。さらに与党が教育界に政治を持ちこみ、自派の地域のみに施設を完備し、自派を支持する教師のみを雇用して政治宣伝させ、教育に不満を持つ学生が騒げば共産党の扇動だとして弾圧することなどをやめ、与野党指導者と教師代表の参加する教育問題協議会の開催、内戦を即時停止して軍事費を教育にまわすことなどを提案。

(86) B-22 P.37 1961年初頭、58年度サーペーベイマン賞受賞式におけるテインペーミンの謝辞。B-22 P.36～39に収録。

(87) B-24 P.46

(88) B-24 P.48

(89) B-3 P.204～231

(90) J-9 上 P.57

(91) B-28 P.53～55 『文学討論会』1974年7月のラングーンにおける討論会の記録。『東より日出ずるが如く』を書くにあたって、依拠あるいはアイディアを得た作品の有無を質問されたテインペーミンは、『パリ陥落』のみをあげた。

(92) B-24『私の小説の中の私の登場人物』は1969年5月のラングーン大学における講演記録

(93) B-30

(94) B-30 P.39

(95) B-30 P.39

(96) 『ストライキ学生』でウー・ヌ以外の実在人物を仮名にしたが出版後物議をかもし、『開けゆく道』では主要人物である地方政治活動家を架空にし、中央の実在実名の指導者をわずかに登場させる。

(97) J-9中巻44章 テインペー、タキン・ソウ、アウンサンらの同居先を訪れたティントゥンに、ことばもかけず、バモー元首相の口調を真似て演説の練習をするアウン

サンの姿など描かれるが、これは彼が口下手にコンプレックスを持っていて演説を猛練習したことや、一見粗野で気分屋であったというJ-1 P.50～55の記述と一致する。

(98) E-1 P.56～57によればミャウンミャ生まれの中国系ビルマ人。ラングーン大学修士修了。41年ビルマ共産党入党。同年9月中国に派遣。昆明西南総合大に学び、45年重慶で、中国共産党（CPC）・国民党・米国会談の通訳をつとめ、45年CPCがBCP代表に承認。46年、湖北チャハルの基地に赴きCPC入党。50年初頭中国入りしたBCP幹部の通訳に就任。67年CPCからBCPに移籍。78年まで北京在住。78年BCP中央のあるパンサンに移住。85年第三回協議会で中央委候補。89年BCP壊滅で中国に亡命。なお、LintnerによればCPBが正式呼称で、BCPはビルマ政府側の呼称という。本稿では1970年に壊滅した赤旗共産党（CPB）と区別するためBCPの呼称を用いた。『東より日出ずるが如く』のエーグエはその容姿や嗜好から中国系であることが示され、B-24 P.45で「彼は大戦前に中国に行って今に至るも戻らない。もう帰って来ないだろう。観察するところ、後から（中国に）行った者は戻っている。彼は中国人になったのかもしれない」と語られるだけで、詳しい経歴は不明であった。E-1によって、作品のエーグエが42年に再登場する場面はフィクションであることが明白になる。なお、エーグエの文学観や革命観には、当時のテインペーミンとそれと一致点が多い。

(99) 例えば村の占い師ウー・アンヂーはB-17 P.267で、沙弥コウ・バタンはB-29 P.10でふれられる。

(100) 「私の夫と私の金」(1934)、「ある夜の出来事」(1936) など。B-20に収録。

(101) 追悼エッセイとして書かれたが小説として扱われ、 B-20に収録される。

(102) J-9下巻 P.145

(103) J-9下巻 P.144

(104) B-2『テインペーミンの肖像』（追悼集）P.27「弟子テインペー」（ウー・ボウニャン）による母ドー・ミンの、丸い目やえくぼの愛らしい容貌、「母」(B-20 P.266、P.268) における彼女の服装に対する考えや包容力は、ティントゥンの女友達マ・ミンウーに一脈通じるものがある。ただしマ・ミンウーは家事全般不得手との設定であった。

(105) Myawaddy Dec. '55 P.82 彼はテッポンヂー・テインペーとして名をなしたが、1948～49年の『開けゆく道』執筆時、子々孫々まで母を偲ぶようにと本名に母の一字をつけ、テインペーミンと改名した。

(106) 「母」(B-20 P.268～269) と J-9下巻 P.140～141, B-20 P.274と、J-9下巻 P.150～155の記述が対応する。

(107) 父は1957年死亡。2才違いの兄は1953年死亡。(テインペーミン長女チーターミンからの書簡で確認) 父もさることながら、この兄については幼時が「母」でわずかにふれられるのみ。『東より日出ずるが如く』のティントゥンにも、兄が一人いたと述べられるだけで、その後一切登場しないのはいかにも不自然である。

(108) たとえばJ-9上巻5章、16章、中巻47章で語られる政治情勢分析は、自伝3 B-31 P.256～259などのテインペーミンの考えに酷似し、「平均的学生像」にかけ離れる。とりわけ第二次大戦のとらえ方は、当時の知識人のそれからも突出している。

(109) J-9上巻P.49

(110) J-9上巻P.188, P.201～202

(111) J-9上巻P.281～282

(112) J-9上巻P.320

(113) J-9下巻P.265～266

(114) J-9上巻14章や中巻44章などでは、ティントゥンとタキン・ソウとの間をとりなし、わずかにめんどうみのよい几帳面さがうかがえる。

(115) B-2 P.203追悼「おお、マウン・トゥイエイン、マウン・トゥイエイン!」(シュエードンビーアウン) マウン・トゥイエインはテインペーミンの出生票名。

(116) B-2 P.314追悼「テインペーミンの政治と芸術」(モンユワ・ウィンペー)

(117) アウンタンもB-1 P.107～110でおよそ次のように述べる。テインペーミンは仕事も有能で読書家であり、地方に派遣されて帰ると直接来訪するなり電話なりで報告するなど党幹部としての責任感もあったが、自分のやりたいことが多数の意志に反した場合、ジャーナリズムを通して又は別の方法を用いて強引に押し切る傾向や、反対者をそれとなく揶揄する習性を持ち、信頼されにくい性格だった。PUP結成時、行動を共にするべきか否か判断に迷ってタキン・コウドーフマインに相談すると、団結を勧められるかと思いきや、「テインペーと一緒にやると提婆達多と組ん

だ阿闍世王の如きになる」と、袂を分かつよう勧められたという。

(118) J-9 上巻P. 23

(119) J-9 上巻P. 57

(120) B-15 P. 82

(121) B-15 P. 19

(122) B-2 P. 271追悼「テインペーミン先生の文学」（ゼヤマウン）。『大学紹介』執筆のため筆者の勤務していたラングーン大を訪れたテインペーミンのことばであるので、1955年すぎの発言と思われる。

(123) B-22 P. 36 1961年の受賞挨拶

(124) B-2 P. 338追悼「テインペーミンの文学の地平」（ティッマウン）

(125) B-21 P. 53～90では、テインペーミンがインドにむかうため潜伏中、ヤンナイン、ネーウィン、アウンサンらに再会し、BIAにかくまわれながら窮地を脱していく様が語られている。

(126) J-9 下巻P. 293

(127) J-11 P. 117

文献

J-1 アウンサン・スーチー ヤンソン由美子訳『自由』集英社 1991

J-2 伊東利勝「ミャンマーの『近代的』ナショナリズムに於ける問題点ーバンダカ・ヤテの『反乱』を素材としてー」『東南アジアのナショナリズムにおける都市と農村』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 1991

J-3 大野徹 「ビルマ国軍史２」『東南アジア研究』８巻３号 京都大学東南アジア研究センター 1970

J-4 『ビルマ史年表』大阪外国語大学ビルマ語研究室 1960

J-5 南田みどり 「文学に見るビルマ独立史の一断面ー左翼陣営統一の夢『ランザポービー』（テイン・ペー・ミン著）の場合ー」『鹿児島大学史録』第８号 1975

J-6 南田みどり「テインペーミンの小説における女性像のゆくえ」『大阪外国語大学学報』第47号 1980

J-7 南田みどり「テインペーミン年譜」『大阪外国語大学報』五十号 1980

J-8　南田みどり　「二つの大戦前夜－『東より陽出ずるが如く』への『パリ陥落』の影響について」『第二次世界大戦とアジア社会の変容』大阪外国語大学アジア研究会 1986

J-9　テインペーミン　南田みどり訳『東より日出ずるが如く』井村文化事業社　上巻中巻1988　下巻1989

J-10　南田みどり　「『東より日出ずるが如く』における『デイヴィッド・コパフィールド』の影響について」『大阪外国語大学論集』1　1989

J-11　南田みどり訳・解説「テインペーミン著『ビルマで何が起こったか』をめぐって」『大阪外国語大学アジア学論叢』創刊号　大阪外国語大学アジア研究会　1991

J-12　矢野暢『タイ・ビルマ現代政治史研究』　京都大学東南アジア研究センター　1968

E-1　Betil Lintner "The Rise and Fall of The Communist Party of Burma(CPB)"1990. New York

E-2　Peoples Literature Committee House "Who's Who in Burma"1961. Rangoon

B-1　Aung Than "Hsechaukhnit Naingnganye Atweacoungmya"1966 2nd ed. Rangoon

B-2　Man Nyunt Maung "Thein Pe Myint Youkpounghlwa"1980. Rangoon

B-3　Mya Than Tint "Kywundaw Hsetywe Yejindhaw Wuthtumya"1974. Rangoon

B-4　Thein Pe Myint "Lanza Pawbyi"1949. Rangoon

B-5　Thein Pe Myint "Dimokaresidhit Mawsitoung i Thinjajetmya"1950. Rangoon

B-6　Thein Pe Myint 'Gaba Luooye' "Thwethauk" Vol.6 No.71 Dec.1951

B-7　Thein Pe Myint "Chit ywe Hkawya"1952. Rangoon

B-8　Thein Pe Myint "Neyittaw Hkithaung"1952. Rangoon

B-9　Thein Pe Myint "Zat Saya U Pho Sein"1952. Rangoon

B-10　Thein Pe Myint 'Stalin hnit Kywundaw" Myawaddy No.88 May 1953

B-11　Thein Pe Myint 'Youksoung Bouda Thadhanawin U Ba Kyi i Baji go

Letlajet' "Myawaddy" vol. No. 11 Sep. 1953

B-12 Thein Pe Myint "Boung Wada hnit Do Bama" 1954. Rangoon

B-13 Thein Pe Myint 'Kenaingyin Kejaba' "Myawaddy" vol. 4 No. 3 Jan. 1956

B-14 Thein Pe Myint "Tawhlanye Kala Naingnganye Atweacoungmya" 1956. Rangoon

B-15 Thein Pe Myint "Budalin hma Athan" 1957. Rangoon

B-16 Thein Pe Myint 'Amyodha Poungdadan Shidhaw Sapay' "Myawaddy" vol. 5 No. 5 Mar. 1957

B-17 Thein Pe Myint "Pyidhujahma Ahman Sha" 1964. Rangoon

B-18 Thein Pe Myint "Tekkatho Meikset" 1964. Rangoon

B-19 Thein Pe Myint "Myanmar Sapay Atwedwe Pyatthanamya" 1966. Rangoon

B-20 Thein Pe Myint "Wuthtudo Baungjouk" 1966. Rangoon

B-21 Thein Pe Myint "Sitatwin Hkayidhe" 1966. Rangoon

B-22 Thein Pe Myint "Taikpwewin Samya" 1968. Rangoon

B-23 Thein Pe Myint "Thi Ta Pyoung" 1968. Rangoon

B-24 Thein Pe Myint "Kyanaw Wuthtumya dehma Kyanaw Zathsaungmya" 1969. Rangoon

B-25 Thein Pe Myint "Dhabeik Hmauk Kyaungdha" 1970. Rangoon

B-26 Thein Pe Myint "Sabaungzu Sapay Webanye" 1971. Rangoon

B-27 Thein Pe Myint "Kywundaw i Achitu" 1974. Rangoon

B-28 Thein Pe Myint "Sapay Swenwebwe" 1975. Rangoon

B-29 Thein Pe Myint "Tet Hkit Tet Lu Tet Hpoungji Thein Pe" 1975. Rangoon

B-30 Thein Pe Myint 'Achitsit Achithman hnit Pattheywe' "Shumawa" vol. 31 No. 370 Mar. 1978. Rangoon

B-31 Thein Pe Myint "Sapay Bawa Zatlanzoung" vol. 3 1981. Rangoon

B-32 Yebaw Hla Myo "Thein Pe Myint dhomahouk Apegan Naingnganye-

dhama"1961. Rangoon

B-33 "Myawaddy" vol. 1 No. 11 (Sep. 1953) vol. 2 No. 5 No. 6 No. 11

vol. 3 No. 8 No. 9 No. 10 No. 11

vol. 4 No. 1 No. 3 No. 8 No. 10 No. 11 No. 12

vol. 5 No. 1 No. 3 No. 5 No. 6 No. 7 No. 9 No. 10 No. 11 (Sep. 1957)

Thein Pe Myint in the 1950s and "As Sure as the Sun Rising in the East"

Midori MINAMIDA

contents

Introduction
1. Pre-publishing period 1950-53
2. On-publishing period 1953-57
3. The influence of the 1950s on the persons that figures in ficton
4. The influence of the 1950s on the persons that figures in fact
Conclusion

Thein Pe Myint (1914-78) was active both in politics and literature. He wrote many novels which reflected his political activities and his opinions about contempoyary problems. "As Sure as the Sun Rising in the East",one of the longest novels in post war Burma, was published in 1953-57. As the background of it was mainly 1938-42, Thein Pe Myint did not seem to write contemporary problems in it. He said he wanted to record the period, so I stated two reasons of it in my former paper as follows.

First, he wanted to give his own reminicences of the so-called 1300 incident. Second, he regarded this period as the prepartory period of the Japanese invasion of Burma and tried to explain why it was possible for fascists to invade Burma so easily. ('On Anti-Fascist Writings of Thein Pe Myint' "BURMA AND JAPAN" Edited by The Burma Research Group, 1987, Tokyo, P. 90)

In this paper I tried to add the third reason why he wanted to record it. At first I pointed out some features of his concerns through his works written in 1950-57, for in some of his essays he said that he started to write it in 1950. I found that his greatest concern at that period was a cease fire, peace and unity of left wings. Then I made research on the influence of the 1950s in the novel through persons that figures in both fiction and fact.

Consequently, the third reason why he wanted to record that period was that he tried to insist on the glory of anti-colonialism and anti-fascism resistence. He tried to give Burmese in the 1950s a lesson from the unity of the left wings in 1938-42, for it was almost impossible to restore the unity in the 1950s. Although this novel does not seem to have any concern with the 1950s Burma,it reflected author's political activities and his opinion on the contemporary problems truely.